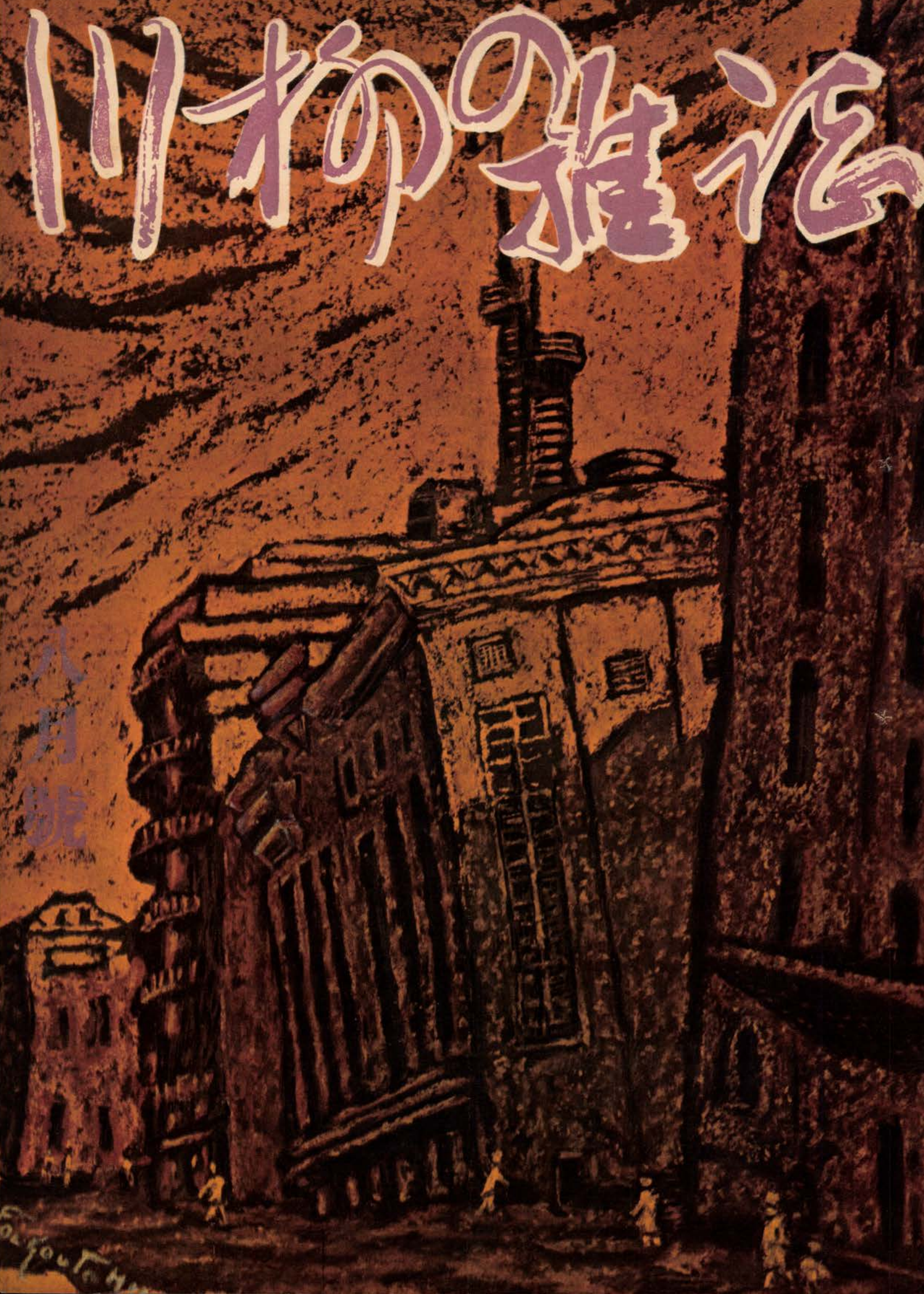
川柳の雑記



小月號

★最高權威の月刊柳誌

川柳雜誌 八月號目次

★

表紙…(大阪・中之島風景)…福富雷童
内外時事……(一)
川柳人と時局……麻生路郎…(一)
螢の光……古川風竹…(三)
川柳合評 火の見櫓……五健・久米雄・水車・民郎・山雨樓…(一〇)
迷り火……安川久留美…(八)
句主として……麻生霞乃…(一〇)
愚談……小畑自由崩…(一四)
武玉川四篇研究(九)……森本鹿山 蛭子東魚 高橋かほる…(八)
ユーモアを探る
身體から出た水……永瀬義郎…(三)
カルピス(句)……前田五健…(一一)
狸……森東魚…(一二)
即興の句……米本貴志子…(一三)
女としての義憤……岡田某人…(一八)
貝釦……寺井鋭々…(一八)
雲中語……岩崎柳路…(七)
家郷奥地 涙源へ……路郎編…(一二)
川柳横町……石崎柳石…(一九)
解題と例句……佐々木三福…(一八)
冷汗
彩票夜話……(一三)
一問一答
★
近作柳壇……麻生路郎選…(一四)
川柳塔……麻生路郎選…(一四)
同舟近詠……諸家…(一三)
不朽洞句抄……麻生路郎…(一)
一路課長……大島清明選…(九)
各地柳壇……(一〇)
柳界展望……(一六)
川・協……(五)
後記……(一四)
社關係の人々……(一四)

★兵士は戰線に！我等は銃後に！

皇紀二六〇〇年奉祝

川柳雜誌創刊二〇〇號記念

川柳とは？の會

いろ〳〵のことが談され、いろ〳〵の事が行はれ、川柳に對して未知の方にも、頗ぶる興味のある會であり、從來にない會を催します。期待を乞ふ——

時日 九月十五日(日)午後一時開會

會場 大阪市東區高麗橋 三越八階ホール

兼題 ★「二六〇〇年奉祝吟」路郎選★「部隊長」「綠雨選★「節米」「鮎美選

講演 各題五句 締切九月十日限のこと

實演 (詳細次號)

賞品 (詳細次號)

★時局柄、會の形式方法に就いては特に考へなければならないので奉祝と記念句會を併せ行ふことにいたしました

大阪市西區江戸堀上通二ノ四六昭和ビル

主催 **川柳雜誌社**

電話土佐堀 三三三 八八一 六六四 三三番

會費不要
來會歡迎

幹事
翠芳 白柳子
慈水 秀雄
友凱 滿潮
小松園 銑人
風葉 春果
斗風 由布
翠陽 潮花
紫香 水客
白峰 いわを
豆秋 八九滿
鋭々 孤二蓬
白雨人 里十九
普天 綠雨

公債・社債・株式・金融
藤本有價證券投資組合斡旋
藤本ビルブローカー證券株式會社
大阪市東區北濱五丁目卅番地
支店 東京・横濱・靜岡・福島・小樽・名古屋・金澤・京都・神戸・岡山・廣島・松山・門司・福岡・臺北・京城・新京・奉天

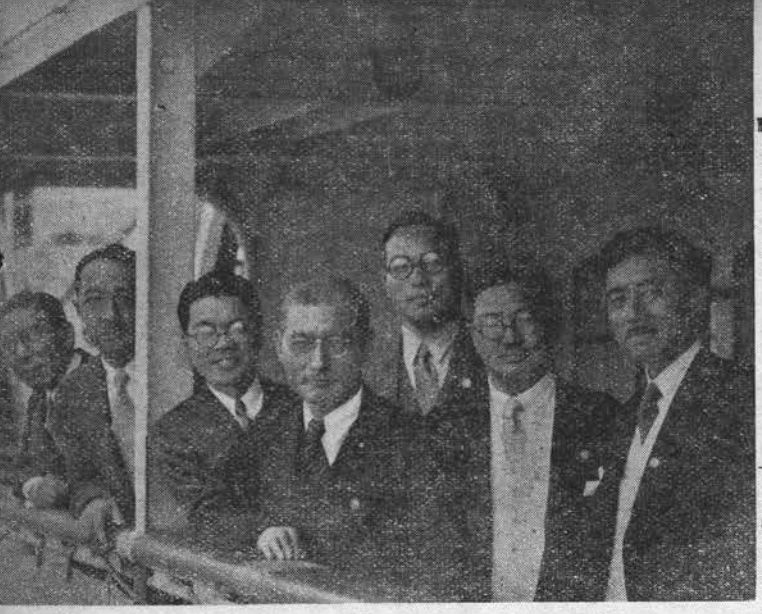
メタル
旗・幕・幟・徽章
カタログあります
大阪市南區
日本橋五丁目北スビエ町
加藤旗徽章店
電話・式 四六七二 七五七五 二五番

麻生路郎★主宰

Pensoj flugas trans la land-limon

川柳雜誌 199

第十七卷 第八號



訪獨醫學使節の一行

向つて右から二人目が大阪帝國大學醫學部教授信濱良博士・博士は筑紫川の畔に立つて居られる大阪市社會課長・柳川人の一行が訪れて招待ゴルフの勝敗を語り合つてゐる。（てに丸ぶらの釣出戸神日六月七）

川柳人と時局

―認識不足の人々に與ふ―

近ごろ私の手許に屆いた柳誌××××を繙いて、川柳人の時局に對する認識不足に啞然とした。少し長いがスクラップして見やう。

（前略）大阪へ着いたのは五月二十七日夕方七時三十分である。岸本水府、住田亂耽、田中南都の諸君に出迎へられて「番傘倶樂部の近くにある壽し屋「一福」で、灘のいいとこを飲んだ。其晩亂耽君に途中まで送られて神戸に帰る義弟のところを探した。

○翌くる日は大阪中央公會堂に開かれた全國都市保健協會總會へ出席して三度登壇大いに咄辯を揮つた。その晩、綿業會館に設けられた大阪市長の招宴で、かなりいい機嫌になつた。そのあと道頓堀へ出て心齋橋筋の人混みを歩いて見た。それでも神戸へ歸つたのである。

その次ぎの日も保健協會の總會が引續き開かれた。午後一時から委員會になつたので道修町へ用足しに行つて三時に會場へ歸つたら水府さんが誘ひに來て呉れた。そこで本會議をすつぽかして天王寺から大阪市中見物をやつたのである。

千日前法善寺裏のおでんや「正」、辨丹吾」で水府さんと飲んでゐたら「番傘」の新人岡村光三良君が見えた。それから三人連立つて戎橋の舟料理「戎藤」（柴藤の誤植？）でおよそよき機嫌となつた。大阪はネオンとそ消えてゐるが酒飢饉の國から出てゐたら酒がよくていいなと感じた。

其の晩（中略）それが濟んでから千日前の「南方」で十時半頃まで僕のためにみんなで歡迎宴を設けて呉れた。その夜、水府さんのことへ一泊したが、玄關に飾られてある朱塗の六尺あまりある酒樽に度肝を拔かれた。翌三十日は早朝水府夫妻の案内で住吉神社へお詣りをした。

○その日午前九時から大阪市の保健施設を見學、午後は郊外貝塚、千石莊の結核療養所見學をなした。

關西川柳懇話會では其晩七時から「おくらやビル」に僕の歡迎會を催して呉れた。集つた人は椙元紋太、本田溪花坊、住田亂耽、近江砂人、市川番茶子、岸本水府、小田夢路、志方蝶二、延原句沙彌、生島鳥語、小西落丁その他の諸氏で亂耽君司會の下にいろ〳〵話がすゝめられたが、小林不浪人に物を聞く會みたいになつた。

○（中略）關西へ行つたら會ひたいと思つて行つた川柳家が相當に頭の中にあつたのであるが、東京へ立寄つて早慶戰を見る計畫のために、さうと關西柳壇訪問のプランを以上で端折つたのである。

以上でこの一文は終つてゐるが、これが青森を代表して大阪で開催された全國都市保健協會の大會へ出席したお役人樣なのである。

次に、この雜誌の編輯後記「それから」を覗くと

○「初めての關西印象記」に書い（たの字落植？）通り僕の大阪入りは五月二十七日である。川柳人に會へたのは何よりの記錄であるが、外米の洗禮には全く辟易した。

○大阪の歸り東京へ立寄つて、早慶戰二日とも見るチヤンスを摑んだことは儲けものだつた。勿論、それも出張のうちに入れてあるのだから勤務先には内緒である。（以下略）

勤務先へは内緒だと、自ら麗々と筆を執る位だから良心の麻痺さ加減は想像に難くないが、こんな男が保健問題で三度登壇して一體何を論じたのか奇異の感にうたれる。東京の新聞に、「近來東京でいろ〳〵な全國大會が開催され地方から代表者顏して東京の米を食ひに來るが、米不足の折柄碌でもない大會で、東京の米を食ひ潰ぶしに來られるのは迷惑千萬だ。」と云ふやうな記事があつたと思ふが、全く同感である。

川柳人のすべてが、それだけは云はないし、遠來の柳友を歡迎することを必ずしも不可とするものではないが、時局に對して、こんな認識不足の川柳人が一人でも半人でも輩出することは川柳人の面汚しである。

歸還した兵隊を迎へるのにさへ、緊張して只管質素に之を迎へてゐる世相である。出張旅費を稼いで徒らに飲んで廻はつたり、早慶戰に二日間を空費したりすることは何事ぞやと云ひたい。しかも本會議をすつぽかすに至つては同斷である。斯かる男を歡迎して共に飲んで廻はる人々の不謹愼振りも又同罪を以て律せられても釋明の餘地はないであらう。

事變はまさに第四周年を迎へ、内閣は四度更迭して國防を強化せしめんとしてゐる。而して皇軍の勞苦は更に更に筆舌に絶するものがあらう。この秋に當つて國精に背反せる川柳人の反省を促すべく警鐘を亂打するのも徒爾ではあるまい。

（圏點は本稿の筆者が附したものである）

不朽洞句抄

麻生路郎

近衛公に大命降下

おもむろに笏でまねいた組閣なり

第二次内閣誕生

近衛さん背負ひ直した重さ也

村田省藏氏の鐵・運大臣に就任を祝して（二句）

その船出けむりも見えず雲もなし

村田さん大きな銅鑼を聞く日也

小林一三氏商相就任（二句）

ヅカガールからも拍手で送られる

引繼ぎの少し會社が大き過ぎ

凰見章氏に贈る

頼むよと司法大臣磊落だ

★内外時事★

★日支交渉開幕（日支兩國の新關係を律すべき條約締結に關する交渉は七月五日より南京で開始）

★滿洲國皇帝陛下大阪港から御歸國（七月六日）

★七、十禁令―奢侈品、不要不急および規格外製品の製造加工禁止（七日）

★内地に四軍管區創設。八月一日より實施決定（十三日）

★米内内閣總辭職（十六日）

★大命近衛公に降下（十七日）

★近衛第二次内閣誕生（廿二日）

内閣總理大臣　近衛文麿
外務大臣兼拓務大臣　松岡洋右
内務大臣兼厚生大臣　安井英二
大藏大臣　河田烈
陸軍大臣　東條英機
海軍大臣　吉田善吾
司法大臣　風見章
文部大臣　橋田邦彥
農林大臣　石黑忠篤
商工大臣　小林一三
遞信大臣兼鐵道大臣　村田省藏
企畫院總裁兼無任所大臣　星野直樹

株式會社 田中源太郎商店

大阪市北區樋上町
電話北(36)二五六六
營業所 大阪・東京・札幌・小倉・神戸・天津・北京・上海・奉天

品目
純國產GTC潤滑油及グリース
國產GTCオイルダツグ・グレダツグ
GTC遠心式油清淨機
GTCピストンリング

川柳 句例と題解

＝路郎編＝

(14) 種痘

★我邦の史籍に、痘瘡流行の始めて載せられたのは、奈良朝時代、聖武天皇の天平七年である。

★牛痘種法を發明したのはイギリスの醫家エドワード・ジェンナーが西暦一七九七年、我が光格天皇の天明六年に天然痘の免疫法である種痘法を發見したのであるが我邦に傳つたのは支那からで、「種痘奇法」「引痘略」の二書の媒介に依るとされてゐる。

★「種痘奇法」は嘉慶十年四月（ジェンナーが牛痘種法を發明した十年後）に牛痘種法が支那に這入つた時、當時支那在住のイギリス人哆啉叹が種痘法の梗概を敍述し同國人斯噹喃がこれを漢譯、同年六月に刊行したが、はじめて我邦に傳はつたのは何時のことか、ハッキリしない。世間の人がこの書のあることを知るやうになつたのは尾張の伊藤圭介が、これに訓點を加へ校刻した時で、即ち天保十二年のことである。

★「引痘略」は邱熹（號浩川）が嘉慶十年牛痘種法の支那に這入つた時熱心に其の術を研究、嘉慶二十二年の冬に脱稿、道光十一年に上梓した。それが道光十八年（天保九年）に再刻され、後四五年經つて僅に二三部舶戴されたが普く世に傳はらなかつた。

★ところが南紀の小山肇成がこれを「引痘新法全書」と題して校刊したのでジェンナー牛痘種法が我邦の醫家の知るところとなつたのである。「引痘新法全書」は弘化四年の出版であるがその序文は天保十三年の春となつてゐる。

★弘化四年七月、鍋島候（閑叟）西洋牛痘法のことを聞き、其醫員楢林宗建に内命を傳へ牛痘苗を和蘭から求めさした。それで翌嘉永元年七月、蘭醫モーニッケが牛痘を齎したのである。

★楢林は累世通詞の家であつた。

★モーニッケが牛痘を齎すより以前に、松前の中川五郎治が種痘の術をロシヤから傳へてゐる。その外、外人から學ばずに西洋牛痘の事を聞いて、發憤その術を工夫した人々もあつた。が我邦では楢林宗建が種痘の始祖として明治三十一年に正五位を贈られてゐる。

★昔、痘瘡の療法で奇拔なのは酒湯と名づける一法である。まだ痂落しない前に米泔汁に酒ばかりを加へ、或は鼠の糞二ッばかりを入れて沸湯とし、その湯で痘を洗ひ沐浴すると痘がかせてこころよくなつたのである。

★又疱瘡神を祭つたこともある。

★痘瘡の食養法はなかなか嚴格だつた。痘中痘後の食はユヅケ飯、シンコモチ、餅、味噌、醬油、豆腐、麩、甘酒、葛粉、カタクリ、長芋、大根、牛蒡、インゲン豆、白瓜、百合、フキ、ウド、茗荷、梅干、干瓢、生姜、飴、砂糖、鰹節、蠣、キス、サヨリ、ホウボウ、カナガシラ、鯛、海參等の類で、慈姑、白柿豆粉、芥、西瓜、柚、甜瓜、栗、梨、茄子、大蒜、胡瓜、鱒、香魚、鮭、ボラ、イナ、鰯、カマス、鰈、ニシン、章魚、烏賊、ブリ、コチ、ハゼ、タチウイ、鴈、雉子等は禁物とされてゐた。

★國法の定めた種痘の方法はラつて相當の物を見せて居るが、この傳說に名高い屋島の禿さんに對しては、あまり好意が無いと見へる。

それは、それとして、本堂裏の小石塚には澤山の幟が奉納されて、大願成就やら必勝祈願やら備前方面、香川縣、阪神、伊豫の西條以東の方面から奉られた幟の字が雨に、にじんで居た「屋島の禿」と書かずに「小八大明神」と記されて居る、禿さんの名は小八と云ふ可愛らしい名である。

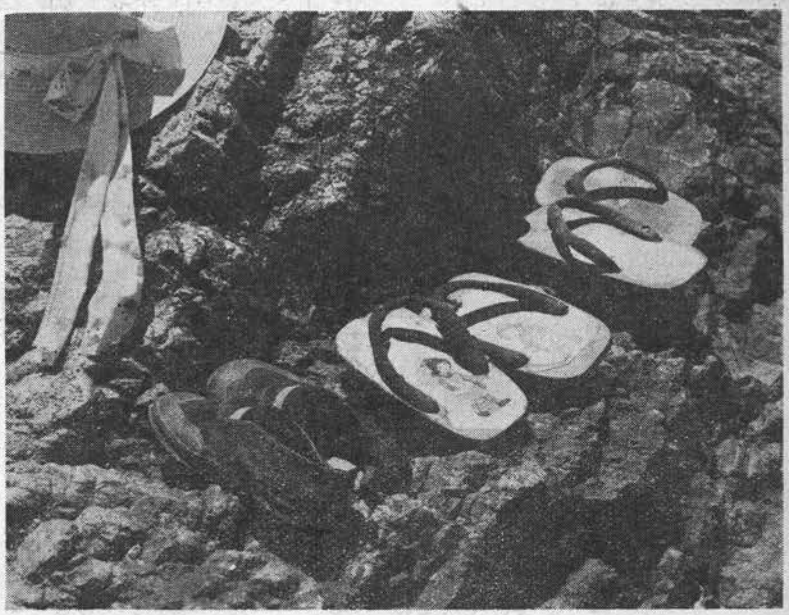
人の名で呼ばれる狸侮れず　五健

山上を一巡すると火の用心の札やら、當山に棲む動物の表示の中に「狸」の在るのも、ほゝ笑ましい、屋島の禿さんは映畫の「阿波狸合戰」にも最後の止め役に出て來た程の大もの狸で、相當の傳說がある、障子を隔てゝ源平合戰物語りを、姿を見せずに聞かせる。つまり當時のラヂオ式で物語と擬音で、那須與市の扇の的的やら景清の奮戰、辨慶の猛闘振りなど見る如くに聞かせたと、其地方の古老の話である。また、何んとかして附近の者に、とりついた節は、普通の加持祈禱では退散せぬ、イ、物を供へた位で承知せぬが、土佐から伊豫讃岐、阿波と荒れに荒れて軍を進めた長曾我部には怖れたらしい長曾我部軍は八幡宮社以外の神社佛閣は燒き拂つて進んだと云ふ事で當時は天滿宮も稲荷樣も皆な、八幡宮の額を掲げて難を逃れた話が伊豫地方にもある、こんな勇猛進軍故流石の屋島禿狸も長曾我部何々なりと云へば、一とすくみに成つたとかで、阿波、淡路の人形芝居に使ふ猩武者を貸つて來て「ヤァ〳〵」と怒鳴れば、すぐ退散して「これは禁物、御免下さい」とお詫びを云つたとか、如何にも狸らしい、尻くゝりの無い所が面白い、現在は何代目とかで「緋の袴さん」と此の地方の人は呼んで居る。緋の袴と云へば官女を思ひ出す、どうも女性らしい、此の緋の袴も大正の御大典には高松市中の奉祝團へ、淨願寺の狸、佛生山法然寺の狸と共に交り大いに奉祝したと云ふ事で面白い話を聞いて居る。

屋島の禿さんに就いてはまだ此の外にいろ〳〵傳說を聞いて居るが、これ位にして、何故「狸」は斯くの如く愛せられるかと考へて見ますと、お伽繪本にせよ大人に成つても、どうも憎めない、それは狸の持つ「飄逸、無邪氣、心體妙用、感謝皷腹、雅氣禪味、知足安分、虚威虚飾のない感じ、隙だらけの化け方、滿腹安眠、天眞野趣、傳說に現はれた報恩、悔悟純林」こんな點が傳說、繪畫、器物から放射され、人に對して何物かの意氣相通する點がある爲めでないせうか、それに狸は利に通じ緣起商買にも愛される、料亭の前や庭に、一升提げて起つ姿はは本當に和やかなものである。

故郷よし氏神が在り親が在り　五健

鎭守の森と狸、兩親から聞く狸のお伽話、知らず識らずの内に狸の憎めぬ愛らしい點が印象つけられて居る關係も多分にあると思はれる、太平記に狐は五十



童心海へ（歩八）むまこみしもさ青の　ラメカ　井福　哲

狸

前田五健

さきに

本誌上へ「田の君」即ち狸の概略談を發表したところ意外の反響があつたらしく各所から「おとなのお伽話」として、まあ少し何か書けとか「狸は好きや、おもろい」「えんぎがよろし」せつば詰つた日々の勞れに一服の清涼劑」てな、オダテに乘つて書いて見る事に致しました、もとよりたぬきの事故眉つばものでお讀み下さい。

今年二回讃岐の高松へ遊びに出掛け例の源平古戰場で有名な屋島へ登りました四國八十八ケ所の内八十四番の靈場である本堂裏に小石を積み上げ極く小さい祠が其の上に、チョコナンと乘せられて居る、これか有名な「屋島禿狸」の社殿であります、あまりに淋しい存在である、傳說やら附近の土産物屋に、あれ程仰山に狸の玩具やら燒き物を賣つて居るのに對して、これでは旅人にお恥かしい次第でないかとも思はれ、茶店のオヤヂさんに聞くと「さあ屋島登山鐵道の方もいろいろ心配して居るのですが……」つまりお寺の方とシックリ話が合はぬらしいのである、尤もお寺には辨慶の何やらとか、其他何々と拜觀料を取

ンセットで十字に皮膚を掻いて種痘することになつてゐる。

★種痘は普通、二の腕の外側にすることになつてゐるが、女の子などは其の痕の目立つのを厭ふので、醫師によつては上搏の内側にする。又、兩肩の上に三つ宛、痕跡をとどめてゐるのや足の兩側にゲートルの釦を聯想させるのや、甚しいのになると女の局部の兩側に三つづゝ植えつけてあるのもあるそうだ。

先生の種痘へ生徒團みに來　紫香

うえぼうそラヂオ體操はさびれて居

折鞄さげて種痘の順を待ち　鮎美

隨想　送り火

安川久留美

國防婦人の白襷は「現認」といふものである、內心はどうか知ら。

◈

九錢の糞色バット十本入を九本入としてほしい、國民の經濟且つ利便を思へば。

墓前に捧ぐる紙燈籠、今年の相場は一箇十二錢であつた。之れが爲め擅那寺の十露盤にも狂ひを生じた。

◈

一日一しよに登山したSといふ友が蟻の行列へ尿をした。蟻にとつては大異變、彼は二三杯の飲酒に奉公日を忘れたのである。

◈

記念日とか奉公日には「すし」の立喰が一番大人氣、海苔卷や握りの起りは乞食の貰ひ溜めなる事を知らぬお客も多い。

◈

尋常一年生にムツソリニーとヒットラーとどちらが豪い？と訊ねたら「フン、知つとらあ」と洒落れやがつた。

生きてゐる母の戒名は墓に朱を入れてから即ち父の死んだ三十二年前から定まつてゐた。

芳林××大姉

法名二字にはつてあつた赤紙を盂蘭盆にそつと剝いで見たら「貞瑞」とあつた。母を見送る日が私の還暦頃であつてほしいと思ふ。母は必ず八十を越さう？

○

戰爭がすめば再び生れ出よ

の追悼吟を送つた岡山市の藤原弘美君が生きてゐたら……偶と彼れの生前を回顧した。彼の作品中。

根が切れてから朝顏の三日咲き

は蓋し「生」の執着だつたか。柳星は弘美のやうな人間であらう。

Sata Special Klinik

呼吸器病科　佐多愛彦

内科　螺良四郎　加藤謙一

診療　毎日午前

東電堂島中町停留所北西入

佐多醫院

大阪堂島北町　電北八二八四

螢の火

古川風竹

年にして女に化け百年にして美人に化ける、凄さがあるが狸には、それが無い、俳諧歳事記などを見ても、風流氣が、たつぷりふくまれて居る（改造社出版歳事記冬の部）何にせよ狸は愛すべきもので、親友富田金蔵堂主人が六百以上の狸關係器物の蒐集の心理も此の邊から出發したものだと承つて居ります。富田氏は明大生時代からの狸蒐集現在、道後町會議員、）さて、話は屋島から淨願寺の禿狸に移りませう高松市五番町に堂々の山門と廣い境內、今でも相當廣いが昔は此の寺の裏側に當る小學校も南側の町家も境內でスバラシイ廣さであつた、私は淨願寺の方丈さんに案內され奧院に通された。（つゞく）

◇亞熱帶國のハワイであるが、蛇も螢もゐない。洋上の樂園に蛇が住まぬことは嬉しいが、螢はゐてほしい。

◇ときをり、米大陸から秣に混じて小蛇が密航するが、すぐに死んでしまふ。その理由を研究する閑人もないやうだ。

◇昨年米人の小鳥愛好會で日本から螢の「タネ」を取寄せ露滋きマノア谷に「植え」たが、まだ螢の光を見た人がない。螢もダメかも知れぬ。

◇天然の螢は望み薄だが、人工螢がマノア谷（ホノルル奧）布哇大學の第二世同胞學徒に依り成功し、明朗な話題を學界に投げた。

◇大學三年生の渡邊博君は一年前からハワイ近海にある螢光細菌の培養研究を始め、このほど漸く、その一部に成功した。燐光性細菌の研究は日本では岸谷、服部兩氏のものが認められて居り、ドイツでは盛んに研究されてゐるが、ハワイでは渡邊君のそれが最初である。

◇大學の實驗室で若い學者は硝子壜に入れた螢光性細菌を見せた。その放射する光で充分讀書ができる。これこそ螢の光で文を讀むでる。

◇學術的の說明は省くが、ハワイ近海には螢光性細菌があり、それが海草、イナ及ライア等の魚族に附着して居る、それを分離培養するのが渡邊君の研究である。

◇培養狀態のよい螢光は十八時間から二十四時間も持續する。

◇培養に要する時間は約四時間で。光は三百呎の遠方からも認められる。

◇渡邊君は猶螢光細菌の研究を續けてゐるがそれから何か人類を益するものが生れるかも知れぬ。

◇此の父は福島縣北會津郡湊村の出身で、ハワイの日本語學校々長である。二男、四女みな秀才である。

◇博君の研究が恰も各學校で「螢の光」を歌つて卒業生を社會に送り出す時に發表されたのも朗らかなコインシデントである。

＊

コーヒーモアを探る ④

身體から出た水

永瀨義郎

わしが女房をほめるぢやないが……僕のアトリエの掃除は女中にも一切手を觸れさせず隅から隅迄自分一人で家內がやつてゐる。その中で一番手をかけてゐるのは床をコスティックで拭いてピカ光〳〵らす事である。

或る日の事アトリエから「一寸來て頂戴」と只ならぬ聲がする行つて見ると「このテレピン油どうしたのか今日はコスティックが溶けないのよ」

僕は茫然自失して了つた。と云ふのは僕のアトリエには便所が未だ出來てない。三階のアトリエから階下の便所迄降りて行くのが製作に熱中してゐる時など困るので巴里のホテルに置いてある小便壺を使用してゐたのだが、その日ビールを飲み過ぎてその壺は忽ち滿員、仕方なくテレピン油の空瓶を拜借に及んだ次第だつたので、そこで「そりあ大變だ!!それはミミミッだよ!!つまり僕の身體から出た水だよ!!」

筆者　文展鑑査・日本版畫協會々員

街に住めば

高橋かほる

京都の四條で立つてゐると東本願寺はどちらへ大谷さんはどちらへ黑谷さんへは何う行けばよろしい東山は遠いですか京極と云ふ賑やかな所は近くですか……と老ひも若きもおしなべて女の人から道を尋ねられましたが、私は京都の人に見へるのか賢こそうに見へるのか。どつちだつしやろ。

ペンシリソム

スラスラ書けて錆びず値の安い此のペン！

国産優秀品

美優裁體
牢堅造構

硬質ムウユヂリイ
白金先ペン

澤井商店

筆年万ンウラク

川柳塔

‖路郎選‖

剝ぎ暦もう半年を剝いだのか　ホノルル　古川風竹

金溜るこゝが趣味とは徹底し
昇給がぢかに讀める渡しぶり
丸い子が描く人の顔みな丸い
黍の穂は土へ歸れと招いてゐる

押賣りへ男が出るとだまりけり　大阪　橋本綠雨

たしなみがよかつた人だと鐘がなり
洋酒を並べマダムは氣嫌よし
いつときはふくれたが女はまけたよ

水が出た話輕便炭が消へ　大阪　高橋かほる

仰向に寢てハモニカを吹き續け
ぢの醫者へ通ふてゐます絹の羽織
せゝこまし相算盤をおいてゐる
美術館草履の音のする所

東ね髪キャベツのやうに堅く卷け　横濱　福田山雨樓

夜の散歩家を離るゝ心もち
勝とある名人戰の棋譜みつめ
潑剌と五月の女みごもれる
すぐ笑みを返して濟ますリボンの娘

好かれやうと仕向ける俺の方が無理か　張家口　岩崎柳路

こう云へばあゝ言ふ女の老練さ
賣女にも懸引の無いひとがあり　大阪　寺井鋭々

夫人顧れば贅澤品ばかり
低級品買ふに苦心の夫人なり
銘仙へパーマネントが派手過ぎる

諦めた筈もやつぱり筈だつた　布哇　高澤一浪

紙にさへ況や世間裏表
戀人に金があらうとあるまいと
外人と呼ばれ肩身が廣からず
ごうしても嘘が言へずにあきれられ
今君の惡口言うて居つたんだ
百弗を儲け頭をほめらるゝ
決心のにぶい女に引きずられ
とは知らず唯金をつぎ金をつぎ
淡い戀ごつちも出世するつもり
好な妓に好かれて不運つゞきです
明月は悟れと言はぬばかりなり
眼をぱちぱち娘は戀をきゝ
薄情にあらず此方の都合です

戀愛も切符制度になつてくれ　大阪　戸田孤筵

骸骨にしてから下女へ鯛がくる
ペートーベンすむまでまてず逃げて出る
禪の本もつてあみだにかぶつてる
れんじ窓子供ついでに見せられる

旅はよしあゝあれもあれも思ひ出し　大阪　中島生々庵

持ち塲持ち塲銃後尊く旅に見る
うたゝ寢に母の氣配で掛薄團
これ食べて見やと母のきうりもみ
重役會議儲け過ぎてのあわて樣
銃後まあこうした裏もあるを知り
末の子と朝のひとときき床に居る
白靴が滿員電車やり過し

T氏一週忌
涙涙三百六十五日暮れ

K氏母堂御逝去
人ごとでないぞ俺にも母があり　兵庫縣川西町　戸倉普夫

係は居らんと新聞讀みながら
仕立賃の事までを聞く女同志
四十過ぎし宿の女中の髪の翡翠

中國筋の宿屋は麥飯なり
麥御飯おゝ御時世だこれでよし
郊外が何の便利ぞ蛙鳴く　福知山　小畑自由朗

背な掻いた手でおつさんの握り壽司
念佛の片手は蠅を擊つかまへ
兒の腹下しぢさんとばさんを取調べ
初戀を語れば妻も負けて居づ
これ算盤お前寄算知らんのか
妻と行く街へ馴染の妓と女將
王手飛車瞬時親子を他人にし
政治論晝寢に阿呆と叱られて

★

久米雄氏宅にて
ごしやぶりの中で二人の歩が揃ひ　下關　櫻川不水

奥さんのきさくさシャツも要らぬなり

秋子嬢へ
勤勞の目に神苑のすがくし
魔法には非ずギヤマン透いて見え
鯉口を切つてラムネに立ち向ふ
女房のゐない夜からねづみが出
精神一到酒は欠かさず

釣錢を追へば女の下駄の下　大阪　田中風葉

もう一度課長の机だけは拭き
切符制薄い甘さを意識する
海はもう更けてハモニカ吹く男
大水に子供嬉しい聲になり

人情と規則の中に生きてゆき

廣島　濱田久米雄

いかに申候とても小役人
昇給に不服な人が酌ぎこほし

七月七日

記念日の行列汗にまかせとき
内職の妻に當世語を聞かれ
制限のヂョッキ默つて出る二人

大阪　魚住滿潮

別の名を佛と云はれ路次の奥
國民の聲はしつかり頼みます
貴殿かて叩けば埃の出る身體
バリーもう陷ちましたかと糸を垂れ
落ちぶれた妾夜店の灯にさらし
闇取引便所を借して貰ふなり
働いて喰ふ只それ丈の難かしい

大阪　岩本雀踊子

タッタ二合父をこんなに喜こばせ
子守唄母の病氣はいつなほる
嫁に行く話私しも二十一
かろきためいき戀かしら戀かしら
おたがひに食べて行けぬが話しなり
よみせから實のなる苗を買つてくる

大阪　清水史路

やせ腕を組んでしぶとい病氣やな
初夏の月雲かいくぐりかいくぐり
片付いた病室けさは簾吊る
土いぢりいつの頃かのヘルメット
初なりの茄子の盗難殺生な
たのもしや捕虜にらむこにらむこと
こんぼこり中學生では阿呆に見へ
滿洲戻り難波で土産買うて來る
盗られたはスフですホホホと笑ひ

從妹夭折

星一つほゝ笑む如し左様なら
娘のことで夫常識なさすぎる
アパートは今かへりましたハタキかけ

女の子逃けこむまへに阿呆と云ひ
墓の子は墓の子偉らそふに這ひ
グライダーを眞似てハタ〳〵風に乘り

大阪　中内翠芳

大峯登山して
山の夜をランプ一つが照らして居
梅雨晴れに物干し台の賑はしさ

下關　多田市多樓

寫眞撮る規律を鹿が亂したり
ハッキリと言ふだけ女傘を取り
金持てぬ證據次々病んでゐる
扇子とは我慾の一分みたすもの
美しく生きたい慾の白髪染

大阪　水谷鮎美

くつろいだ月が出てゐる里の母
バス故障大阪驛を見上げたり
茶房から雨が上つて虹が見へ
天一天上ねころんだまゝ晝になり
角帶の弟が來る夏祭り

德島縣穴吹町　姫田夕鐘

百姓の眞似して腦貧血を起し
猿又へ風を入れてる暑さなり
施術するのを大安まで延ばし
鮎釣が營業と云ふ眼のうごき
マヂノ線ところてんの様に拔かれたり

名古屋　吉田水車

ドレスてふ名に又賣れるアッパッパ

映畫「支那の夜」を觀る

屈辱の激怒に出たり日本語
姐さんのお古と見えしアッパッパ
申譯ほごになすびの花が咲き

大阪　後藤青兒

護國神社合祀祭

かがり火へほのかに浮ぶ遺族席
體操を花の中でもする銃後
御奉公兎の子でも殖しませう
葱畑がつゞき鯉幟も上り

子寶へ安心と云ふ切符制
外米も物かは男の子を產み

大阪府柏原町　宮岡白峯

呑めるだけ呑めとも云へぬ慰勞會

七月七日事變記念日(二句)

妾なき敵を求めてゐる眞夏
記念日だせめて扇子を置き給ふ

大阪　正本水客

挨拶のあとは新聞讀みふけり
まあ美人の部だねと乘氣少しみせ
約束へ女は雨の支度で來
洋裝が似合ひ眼だけで笑ふなり
胸にバラさして二十才をとうに過ぎ
金語樓に似た人が居て汗を拭き
次々とおかしい程に胃をこはし
歐洲を論じて居れば無事でよし
ハンドバッグの中はものうきものばかり
純白な朝鮮服に風はらむ
お一人様二本以内で高くつき
未亡人美しき貝に似て暮し
豆腐屋と屑屋と巡査大掃除
看護婦の少さな癖を見逃さず
金を賣りませう場末の映畫館

豐中　黑川紫香

先客の裸が氣輕う迎へに出
堤坊に牛遊ばせて晝となり
嘘ばかし云うて戻つた灯が暗し
楠の太さ四五人休みに來
坂ばかしあつて別莊地と云はれ
片つほの下駄が浮いてる水害地
長袖を着れば矢つ張り女の子
星を見る女きれいな線で立ち
浴衣着て恩師驛迄送つて來
奥さんが聞き手靜かな住ひなり
扇バチ〳〵和尚の丸い膝
先祖みなねむり給ひし石に苔
首筋を扇いで云ひ譯めいた事
貰ひ風呂ついでに西瓜よばれて來

小使ひに金を借りてる中學出
町會へシャツ着たまゝで指圖に來
外人もおじぎして行く湊川
二時間後子供は逆になつて寢る

大阪　大坂形水

非常口がらくた物の置き場にし
二階から腕白ぶりを見てゐたり
遊ぶ子の一人下駄ちびてゐていゝし
七七令早耳筋は逃げた後
新綠も知らずバタ〳〵するばかり

大阪　丸尾潮花

記念樹がこんなに伸びて子が五人
地球儀ののぞく窓なり風薰る
寫眞機へ遠緣になる子も並べ
公休のプランを祕めた喫茶の娘
喫茶の娘別れた人に似て淋し

大阪　岩橋双虎

新黨の議論暖簾をまたくゞり
制限のビールは泡を立てゝつぎ
梅雨晴れて女話の多いこゝ

大阪　岡田某人

御着任部下の机の位置も替へ
旅の眼へ軒並みにある燕の巣
二杯きりのビールへ土砂降りまだ止まず
絶景へ箸をわすれたのに氣付き
日本は松の姿へ銀砂子
奇遇の聲の漫才に似て
降りましたなあゝ爪革持つて立ち
運轉手闇の二人だなゝにらみ
持つものを持たず云ひたいこゝが言へ
花菖蒲ひゝ日曇つてゐるもよし
茄子トマト胡瓜つゝめに大過なし

尼崎　酒井斗風

雜魚を釣るそばで拾ひ屋めしにする
自働扉で自分の弱さふゝ感じ
人情のなき街にしてなつかしく
偶然を信じるような日がつゞき
花いゝしたゝひたむきに生きんゝす
カンナ咲き靜かな朝を讀書する

大阪　北川春巢

連彈に着物の事も云ひ合せ
新婚の隣新婚越して來る
三疊を應接にした新世帶
百二十億貯蓄に蟻が貼出され
自由主義者案外孝子にてありき
農繁期醫者は寢ゝれゝ云うてくれ
ホームドレス女中が着たで舊家もめ

下關　濱田賢次

湯上りへ將棊ならべてまつてゐる
吊橋もあつてうれしい二人連れ
ビール片手に女給の手相みる
古疊ばかり家主はもつてくる
素通りへ女給ゝしての聲をかけ
パラソルをのぞきこみたい二階借
父は父僕は魚屋きらひなり
惡友に度胸をきめて貸さぬなり

町横柳川

★キリギリス史路

前號でキリギリスの比喩問題が沸騰した記事を讀んだ史路クン、病を養つてゐる身に痛切に感じたのか、不朽洞へ次のやうな書簡を寄せた。

「九十七度と云ふ二階住ひ、うだるやうな午後の病室、時々は家内の住む下座敷へと避暑に下ります。問題になつた名句キリギリス、こゝでは梯子段を上つたり下りたりして悲鳴をあげて居ます」と。

★主幹と主幹

近衞内閣で内閣書記官長に、第二次近衞内閣で司法大臣の椅子にドッカと腰を下した風見章クンと路郎主幹とは、二タ昔ほど以前に同じ社に勤めて机を並べてゐたことがある。そのころ風見クンは「工業之大日本」の主幹で、路郎主幹は「商業之大日本」の主幹であつた。ある時、この二人がまさになぐり合ひの喧嘩をおッぱじめやうとしたところ、最近滿洲へ砂金をどうとかすると云つて出掛けた三好正明クンが、あの義足で、しかもキリギリスのやうな身體で、二人の間へ飛び込んだので毆り合はずに濟んだ。そして談合つて見たら突込む奴があつて風見クンの誤解だと判つた。判つて見れば釋然として舊の如くなつたので路郎主幹はこの時以來風見クンが好きになつたといふ話。

★キリギリスの首實驗

高鷲亜鈍クンが瘍で入院してゐると、虫籠を提げた母堂が見舞に來られた。

「何んの虫や」と病人が訊くと、「キリギリスだす」と母堂が答へられた。

キリギリスと聞くと、亜鈍クンは恰度見舞に來合はせてゐた福富畵伯と、大坂形水クンと三人で顏を見合はした。そして三人でキリギリスを見直すことにしたが結局痩せてゐないと云ふ結論に到達したそうな。

社員を募る！

男女を問ひません。
採用　編輯部・營業部　二名。
履歴書（寫眞と共に）郵送の事。
面會日追つて通知致します。
手當其他委細面談の上。

大阪市西區筑前バシ電停前
昭和ビル二〇一號室

川柳雜誌社

雲の上に佇立　（○○山上の岩崎柳路氏）

蒙疆奥地皇軍慰問行

現地にて　柳路（川柳）

共產匪さあ出て來いと鐵兜
縱列へ洗濯の姑娘手を擧げる
熱演の又部隊長にほめられた
吹殼を拋れば拾ひに裸の子
團長を困らせて居る妓が一人
小休止則へ妓が走ること
谷間行く我れ緊張の武者振るひ
よく見れば友軍であつた有難さ
立哨へ御苦勞樣と旗を振り
涙源ださあ涙源だ旗振りませう
蔚縣で寢佛さする女の子
慰問使の無事に歸つた陽燒なり

蒙疆奥地　涙源へ

張家口　岩崎柳路

私たちのやうに、事變前から蒙疆張家口に在住し、事變勃發と共に、長驅熱河に難を避け、皇軍の快勝により治安が維持せられるに及んで再び張家口の釘づけの我家に立ち戻つた者ほど皇軍の勞苦の如何なるものであるかを知るものはあるまい。

我々はこゝ數年間、張家口にあつて皇軍の慰問については微力の及ぶ限りをつくして將兵の勞苦をお犒ひしたとは云へ、更に更に奥地の皇軍を慰問する機會を得ないのを甚だ遺憾に思つてゐたが、今回はからずも當地の三業組合に於て左の如き慰問團を組織し、○月○○日に出發、○○日に歸張の全行程七日間、開演場所十二ヶ所、開演延時間廿五時間卅分、走破距離二千五百粁、時折りの小雨を冒しトラック二台の强行軍を敢行した。

團長●早野辰巳（丸は）山口寫眞（案櫻閣）岩崎武夫（オペラ）中谷戈吉（尾ノ上）古田金治（紙國）小山美喜男（書記）大竹又一師小万（案櫻閣）三代治（對翠亭）小雪（亞細亞亭）花代（星乃家）好蝶（尾ノ上）松千代（安城）鈴代（丸は家ノ葉（双葉）真次（山月）メリー（オペラ）置島トミ子

時々危險が迫つて來たが前であつた。

多年共匪討伐を目のあたりに見て來た我等にしても危險地區は危險地區であるだけに武者振ひすら感じつゝ前進をしたが、民間の主催として蒙疆地區皇軍に絶大な好評を博した。

事變後二ヶ年以上も女を見なかつたといふ多くの將兵たちに感激されては危險も何もふつ飛んで、こちらもすつかり感激して終ひ、體の疲れも二日目あたりからは馴れて、まるで旅興行師のやうな氣分さへ出て、奥地を次から次へと各部隊を慰問して廻り、大成功で軍部からも感謝とお褒めの言葉をいたゞき、日燒で眞黑になつて戻つて來て、これが自分かと見直した位であつた。

歸張後、人見部隊長から直接お招きに接し、慰勞の言葉をたまはり、反つて感激した次第であつた。

★

奥地の各部落では反英熱が旺んで、「停止對英合作」「謝絶英人的雇傭」「不買英國貨」「英是戰禍首」などのポスターが貼られてゐた。

★

途中で北山悟郎君の令息明君の現地部隊へも慰問に立寄り一泊したが、同君は其の部隊から更に奥地の山の中の警備隊に廻はされてゐたので遺憾ながら會へなかつた。北山君の部隊長は私の事をよく知つて居られて

「川柳のオペラさんですか。北山君は貴方が慰問に來て下さつたことを知つたら、どんなにか喜ぶでせうに、殘念ながら、今、山の方に居るのでお會ひ出來なくてお氣の毒です。」

と、隊長も頻りに殘念がつた。しかしお國のために奮鬪されてゐる同君を偲び、慰問金をことづけて引揚げた。

★

小雨が多くて寫眞はうまく撮れなかつたが、せめて其の一端だけでも知つて貰ひたいと思つて發表することにした。

★

汽車もない、トラック二台での二千五百粁の皇軍慰問は斯くして終つた。

現地で「踊スカーサ」のラペオ（ボーリメの）

（1）我々の前後は警備のトラックで護衛せられた。

（2）○○方面で共匪の子供スパイを捕へ我々のトラックで運ぶ。中央白シャツの子。

（3）涙源奥の長城線

（4）目的地○○に近づく。

（5）始めての娘子軍に珍らしがる百姓。

カルピス

（其の三）

編輯の夜、集まつた人達で又カルピスを味ひながらカルピスの句を創つた。

カルピスを少しこぼしてよく笑ひ　紫香
つぎ〳〵とカルピスが出る座談會　同
活動にきめてカルピスみんな吸ひ　同
カルピスを出して暫く待たしとき　同
新家庭またカルピスの客がくる　同
カルピスをよばれて見舞歸るなり　水客
待呆うけらしいカルピス雨になり　同
奉公日　ぢやあカルピスを持つて來い　アート
勉强をなさいねカルピスあげませう　同
カルピスを虫籠持つたままで呑み　リリ
カルピスでも呑まうと夏の戎橋　同
コールカルピス熱もやうやう下り坂　葭乃
カルピスは乳色濱はテント張　同

武玉川四編研究（九）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

(210) **三ツのうち目も齒もよくて哀也**

省二＝その一つは言はぬが花か――衰へて哀れであらう。

塵山＝老人でなければ、此の句意を解する事が出來ぬ。

東魚＝誠に哀れなりであるが、下らぬ句。

(211) **三味線の屆かぬ所へ口を明**

省二＝判然とせぬ。

塵山＝遊山舟などを、陸の方から遠望して暗に羨むのであらう歟。

東魚＝稽古所で下手な弟子が、三味線の合せやうもなく唄ふ場合ではないか。

(212) **狀を見て火を吹やうな貌をする**

省二＝狀に何にか思ひ當るやうな事が書いてあつたので、聊か驚いた面持ち。火を吹く顏とは、（火を起す時に息を吹きかける顏つき。）

塵山＝何か意外の事が書いてあつた故、唇を尖らして妙な顏をしたのである。

東魚＝書出しか何かの狀がきて、ホヽウと驚いたのであらう。

(213) **假橋の笊の目をもる小侍**

省二＝「笊の目」は橋貫の意。小侍は見習であらう。「行く先きの犬と惡意な小侍」などと詠まれる。だから笊の目も、もれる筈だ。

塵山＝小侍でも武士のはしくれだから、橋錢は取らぬのである。

東魚＝異見なし。

(214) **二代めに成と牡丹のつき上り**

省二＝初代は辛苦努力に成功。二代目は贅澤になりかける。牡丹は福貴草と呼ばる。二代目にはつけ上り氣味に咲く。

塵山＝「つき上り」は「つけあがり」の誤ではない歟。つき上りと云ふ江戸語は無いと思ふ。

東魚＝「つき」は接ぎではないか。初代の苦心の後二代目で家の礎が定まつた事を富貴草と云ふ牡丹にかけたのかと思ふ。

(215) **時明り旅の心をなくさめる**

省二＝空が曇つて居る中に、時々雲が薄くなつて一寸明るくなるのを時明りといふ。淋しい旅の心持ちには、時明りも亦慰めになる。

塵山＝大井川の川留の句に相違ない。

東魚＝異議なし。

(216) **ほうろく割た翌か大雨**

塵山＝大戰爭のあつた翌日には、大雨が降るといふ俗說がある故、擊劍の焙烙劃の試合を行つた翌日、大雨が降つたと云ふのである。

東魚＝野仕合の焙烙劃はやつた覺えがある。狼藉した跡の大雨に、寧ろ靜さを感じさせる處が、句の命であらうか。

省二＝私は試合といふ事には氣づかなかつた。家庭で焙烙を割つた場合と思ひ、何にか適切な俗傳がありはせぬかと、探したのである。

(217) **歩行ぬ舟を三味線で引**

塵山＝「歩行ぬ舟」とは、懸り舟のことらしいが、それを三味線で引くとは何の事か。それとも鰌魚に魅られて動かぬ舟で、三絃を彈いて其の危難を免がれたと云ふの歟。

東魚＝船脚ゆるく賑やかに、三味線などを引いてゐる川船遊びの趣を、かう云つたのではないか。

省二＝三味線の調子位に、舟が徐行するのであらう。

(218) **重手代俵のうへに畏り**

塵山＝藏前の札差の番頭かとも思はれるが斯く斷言する事は出來ぬ。

東魚＝重手代は、おも手代で支配人格のものであらう。入船の場合の樣な氣もされるが「俵の上」が判明せぬ。

省二＝重要な椅子に、どつかと座つて支配して居る、と丈けではなからうか。（俵は單にその意味を形容して用ひしもの）。「北國より重手代歸りて、只今二百貫目御倉屋敷へ渡すぞ」（胸算用。）

(219) **猫の戀最う飽か來てほとゝきす**

塵山＝春が過ぎると共に、猫の戀も醒めると云ふので、時鳥は只夏の來た事を聞かせたのであらう。

東魚＝天のものと地のものとを取合はして時の移りを詠むだのであらう。

省二＝騷々しい猫の戀と、然らざるものとの取合もあらう。

(220) **その時は熱て言ふたに末の松**

塵山＝「末の松」は、古歌に多く詠まれた、末の松山のことで、之れに就ては『秋の寢覺』といふ書に、『末の松山の本緣。此山を波のこえむ時、我契りは變らむと云ひし事あり。委くは奥儀抄、顯註密勘などにみえたり』とあるが、此の句は、自分が病中に何にか約束をしたかもしれぬが、それは本心ではなくて高熱の故であるから、今はその約束を取消すと云ふのであらう。

東魚＝實際、思ひつめてゐた事を、熱で口走つたのがもとで望みを達し、末の契を結び得た方であらう。

省二＝結ぶ方であらう。

(221) **伽羅のあぶらのかへる光陰**

省二＝歲月が經つて伽羅の油がさめる。役にたゝなくなる。

塵山＝伽羅の油とは鬚附油のことであるがそれを永く遣はずに置くと變質するので、香氣も失せるのである。

東魚＝容色の衰へも連想される。

(222) **晉頭の扇鼻息てぬれ**

省二＝鼻へ扇をあて、晉頭をとるので。

塵山＝夏祭の手子舞などには、斯る事が實際にあるかも知れぬ。

東魚＝夏祭の暑い時期でも、しめりはするであらう。

(223) **瀧にうたれてすつと聟入**

塵山＝瀧を浴みて垢離をとり、而して聟入りをするらしいが、其の人物が不明である。

東魚＝「艱難に耐へ切つて」と云ふ意味を、「瀧にうたれて」で現はしたので、店員が聟になり上つた場合ではあるまいか。

省二＝句意判然とぬせ。「瀧にうたれて」は文字通り解し、信仰心が厚いところを見込まれての聟入りならむか。

(224) **十五の禿よく夢を見る**

省二＝十五といへば、もう、たゞの年でない。いろ〳〵の夢を見る程複雑になる。禿に於てをや。

塵山＝思春期となつて種々の妄想を夢見るのであるが、妓楼の禿などは特にそれが早い

東魚＝禿離れをしやうと云ふ年頃、事々に氣を配るやうにもなり、何事も忘れて熟睡する時代を通り越したので、仄かに戀の心も動く。

(225) **五十餘りとなれば、世事人情にも通じ、ものの哀れも知り、關守としての貫祿も備はる。年の劫。**

省二＝五十餘りとなれば、世事人情にも通じ、ものの哀れも知り、關守としての貫祿も備はる。年の劫。

塵山＝五十而知天命で、貫祿も備はるであらうが、世情にも能く通曉し、綏嚴よろしきを得るとであらう。

東魚＝前説賛。

(226) **棒突の反りは腹から上の物**

省二＝「辻番は棒をつかぬところぶたち」の句もあるが、棒突の姿勢こそ、腹から上の反り加減に威嚴も保てるだらう。

東魚＝反り身になるも、役柄からの癖である。そこに仄かな滑稽味もうかゞはれる。

塵山＝「辻番は生きた親爺の捨所」といふ句もある故、江戸時代にはこの句に反して、腰に梓の弓を張つた、棒突も有つたであらう。

省二＝組合側には腰の曲つた者もあつたが、大名の方は六十歳以上二十歳以下は、採用は出來なかつたといふ。

(227) **日蓮の天窓は古し神無月**

東魚＝毎年々々のお會式に、宗祖日蓮の木像を拜する、その像の天窓も古びが見えると云ふのか。

塵山＝神無月は、髪無しを利かせたのではない歟。

省二＝判然とせぬ。日蓮の天窓といふと、木像に綿帽子をきせる事に思ひ及ぶが。日蓮の句には「十月」と詠むだのが多い。「神無月」とあるところにも、注意を拂はねばなるまい。

(228) **二階から心の所へ咳をする**

省二＝この咳たるや、意味深きはいふ迄もなし。昔も今も同じ。「二階の聲のぬける傘」（金砂子下。）

東魚＝初編に「二階から心の人へ咳ばらい」がある。その方が此句より表現がうまい。

塵山＝前説の如く「心の所」は、少し面白くないと思ふ。これは「人」でなければならぬ。

省二「人」ならば頗る明瞭。だから「所」といつたのに、工夫がありはせぬか。

(229) **譯を咄せは長いわたし場**

東魚＝わたし場の出來た由來を、咄せば長いといふのか。旅の身の上を渡し待つ間に咄せば、と云ふのか、前句なき故、場合が分明しかねる。

塵山＝逃亡した若い女の、身の上話ではない歟。場所は鎌倉へ行く道の、六郷の渡ともとれる。

省二＝東魚氏説通り二解し得られる。（武玉川には、いくらも二解される作があつて迷ふ。）先づ似て身の上話らしく感ぜられもする。六郷なれば「長い」は十分いきる。

(230) **竹馬を止ると聟の名か付て**

省二＝竹馬乘など止めると、もう聟殿。

東魚＝子の成長の早さが思はれる。面白い句と思ふ。

塵山＝是れは許嫁で、未だ名ばかりの聟であらう。

省二＝私もさう思つてゐた。

(231) **請狀の少し早いて年おとこ**

東魚＝同じ時に奉公に來た二人であるが、請狀の出たのが、一ト足早やかつた丈け、兄キ分として年男の役をつとめる。

塵山＝事實に有りさうで、面白い句だと思ふ。

省二＝年男とは運がよい。

(232) **うき名か立て乘物て來**

省二＝浮名がたち、噂が高くなつたと思ふと、もう乘物で入込むでくる。

東魚＝「うき名」とあるから、遊女か何かが忽ち請出されて、妾などに乘込んでくる場合ではあるまいか。

塵山＝榊原侯に請出された、十代目高雄であらう歟。素人ではなくて遊女と思はれる。

(233) **旅ハ捨物鑓の跡先**

東魚＝鑓を立てゝ道中するやうな身分の侍と旅の跡先共、庶民の流行者は萬事が、（上方言葉で云へば）ワヤだと云ふので、「捨物」は、さつぱり良い處がないとの程の意かと考へる。

塵山＝前解の如くであると、「捨物」は「綏物」でなければならぬ。判つたやうな判らぬ句である。

省二＝全く判つたやうな判らぬ句ではあるが、捨物なる言葉は、「捨物にして抱ついてみる」、「捨物にしてやつてみる文」、「捨物にして屆く空炷」等で、大體判斷がつくかに思ふ。句意は東魚氏説の如くに思ふ。大名の道中などに會つては、旅氣分をそゞのである。

(234) **忘れてはそく飯のへらぬ置所**

省二＝續飯などは、毎日要るものでないから、置所を忘れては減る筈もない。

東魚＝前説に異議はないが、何となく自分には、はつきり分りかねる。

塵山＝上五の「忘れては」は、どうも判然しない。

武玉川四編研究正誤表（一九八號）

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
九	二	二七	一疲	搜

あらゆる趣味のお稽古場

松坂倶樂部

手はぢきから奥義まで氣輕く、樂しく、御上達

會員募集

お稽古目

長磐 常津 清元 小鳴 唄物

尺八 箏曲 謡曲 舞踊 小唄 能樂

ピアノ 聲樂 書道 日本 茶道

料理 華道 洋裁 俳句 川柳

氣學 棋道 松坂レコード吹込所

川柳講座

川柳雜誌主幹 麻生路郎先生 擔當

はみ込申御へ

七階 松坂倶樂部

話電（表代）三〇〇三番

松坂屋

大阪 日本橋

高鷲亞鈍氏の「比喩の問題」の反響三つ

句主として

麻生葭乃

前號月評會の席場で私の「**初蚊帳の中はシヤツ着たキリギリス**」の句について大分物議が持ち上つたやうでありますが、私はいつもの物嗅さから、萬事の批判は皆様におまかせする積りでゐました。

處が七月二日の朝、貴志子さんから私へ宛てた手紙が到着しました。それは例の「初蚊帳」の句評に對しての一言でありました。同性のよしみから、貴志子さんが聲をかけてゐられるのに、私だけが知らぬ顔もしてゐられぬ破目になつて來りました。よつて次に句主としての意見を少々述べさせて頂きます。

キリギリスに喩へられた人間は、あの場合子供であつても、夫であつても、或は泊り客の親戚の伯父さんであつてもよい譯です。要はシャツを着ながして手脚が特に細々と見えるおかしさを云つたまでの事であります。初蚊帳の珍らしさに、座つたのや、腹這ひになつたのや、脚を揚げたのや、いろんな風體のシャツ姿が、螢籠にも見える蚊帳の中でころがつてゐる風景は毎年繰り返へされてゐる事であります。

私が此句を詠んだ場合、讀む人の想像の如何によつて、キリギリスに喩へられた人物が、よしんば、路郎であつたといたしましても、何が故に侮蔑を感じなければならないのでせうか。其感情からして、私には不可解であります。キリギリスにしても、カマキリにしても、あの涼しさうな綠色のからだ、纖細な四肢、輕快な動作は見るから可憐な情が迫つて來て、少しも憎む氣持ちにはなれないのみか一種の親しみさへ感じるものであります。

一匹の虫に喩へる事はけしからぬと云ふ氣持は結局、我儘な人間の悪い癖でありまして、自分達の世界を他の世界よりもシューペリオアに考へすぎるがための缺陷であります。若し動物や植物が我々の言葉を解するならば

川柳合評 火の見櫓

前田五健（松山）
濱田久米雄（廣島）
吉田水車（名古屋）
石曾根民郎（松本）
福田山雨樓（東京）

山雨樓＝では私が進行係を勤めさせて頂きます。どうか忌憚なき批評をお願ひ致します。先づ五健さん！御提出句に對して一つ蘊蓄を傾けて下さい。

藁屋根へ雪と降れ〳〵　句主　葭乃

冬の星

五健＝私は川柳に對し劃合に廣い意見を持つて居りまして川柳は無邊廣大にして縱横自在であると考へて居ります。こゝから出發せぬと一寸私の心持ちが判りませんので……葭乃さんの句は常に私を引きつけて此の吟以外にも澤山ありますが「藁屋根」を拜借致しました。鋭く深く、そしてなだらかな叙法、薫り高い川柳だと存じます。「と」緊めて「降れ降れ」と緩めたうまさ、人臭い社會臭い川柳の外にこんな川柳もあると自分も感心し他の俳人連にも見せて共感を得たものであります。從來の「輕さ」「お可笑味」「皮肉」も勿論悪くはありませんが「眞」「情」「美」の川柳境地も如斯あると示された氣が致しました。然し私等がめつたに眞似すると失敗するものと思はれます。餘程燃燒して白熱化された「川柳心」でないと、こうは出來ないと存じます。

久米雄＝提出者の説明に盡きてゐると思ひます。藁屋根の上の星といふ着想と表現とは燃燒され切つた句境によつて表れるものと思ひます。瓦屋根、ビル文化住宅のどれを持つて來ても、その氣持に於てぴつたりと來ません。

水車＝靜觀し切つた人生の哲理、此句から世の常の川柳眼的なものは受とれませんが新らしい川柳の進むべき途を示して居るやうです。勿論新らしいと言つても新らしがらんがための新らしさではなく川柳の一分野にも斯うした境地のあることを作者によつて表はされたものです。季感的なものを強く感ぜられます。童心にふれるものがあり作者の此句に藏する內省的躍動を大きく描いて居ると思ひます。

民郎＝葭乃さんといふひとの氣持が出てゐる句と思ふ。そこには女らしさがある。そして大都會人がひとゝき、田舍への思慕を寄せんとする有閑さをあらはした句ともいへます。それらしくぢつとつむつた瞼に、あり〳〵と浮び出る風景らしい。

山雨樓＝ところで「冬の星」の冬は雪と重複して一寸筆を入れたいやうな氣がしますが、さてこの下五はよくおさまつてゐて動かない。抒情豊かな葭乃奥樣らしい純な句である。かつて黑木莢豆（現在鵜足）氏は葭乃さんは神樣みたいな方だと云はれたことを同氏のお宅で聞いたことがありますが、この句の氣持はほんとに雪のやうに純化されたものですね。

受付の窓を出征旗が通る　句主　秋子

久米雄＝聖戰に行く旗の波の張り切りやう。だが銃後も負けてはならない。その持場々々に緊張の顔が揃つております。その一人である受付子の目の前を兵士を送る歌が流れて行く。一瞬肅然襟を正して銃後の護りを誓はずにはゐられないのであります。窓硝子を通じて張り切つた銃後風景を畫き出すに受付子を持つて來たところ凡手でないと思ひます。

民郎＝それほどの感銘をおぼえませんね。出征といふことに對しては私も銃後のひとりとして萬腔の歡送を惜まぬものでありますが、やはり句としては平凡ではないかと思ひます。受付子と出征旗のかもす感情にいくばくか深くありたいと思ひます。

水車＝取材は必ずしも異とするに足りませんがこれには二つの觀方があり、今の今迄一緒に机をならべて居た同僚が赤襷も勇しく別れの挨拶をしに勤め先へ來てやがて激勵に送られて今しも受付の前を通つたといふ場合、又受付の窓越しに見える街頭の一風景であるのなら視野がせまい瞬間的な寫生句に止まるのではなからうか。

五健＝一讀客觀の川柳と思ひましたが左樣でなく、裏に包まれた主觀の迫力が犇々と強くにじみ出て居ます。此句を見てフット思ひ出したのは、俳壇ホトヽギス派の重鎭富安風生氏が「俳句と云ふものは、セツパ詰らない其所からいつも一歩退いた所で客觀する點に特色を持つ文學である」と申されて居ましたが、此句も客觀の背後に退いて自意識の燃える樣な主想を見たのはうれしい事であります。つまり川柳は風生氏の云つた俳句の逆を或は眞正面か眞ン中を衝く所に特色があるのではないでせうか。

山雨樓＝受付と云ふ狹い視野から眺める日常は、單調でしかも雜多な事象の連續であるが、ふと眼にふれた出征旗、赤襷の若者の緊張した姿は作者（女性）にとつて異樣な昂奮と感慨を齎らしたのであらう。作者には他に優れた句が多い。お次は民郎さんに。

油虫命頂戴仕る　莢豆
動物園の兎は隅へほつとかれ　里十九
春風に土筆はエロのない姿　淞外人
向日葵のこけた姿が支那に似る　山雨樓
糸瓜〳〵俺の拳固を受けて見よ　耕一路

の句に對して何と答へるでせう、「天命に從ふ事を知らない、タイラントよ私達は少なくとも俗世界のあなた方と同じやうにあつかつて貰ひますまい」と空うそぶいて終うでせう。しかし句主にさう見えるものは仕方がない。さう感じられるものは仕方がない。句はヒユマニテーを超越すべきもの、熱情の中に頑として動かぬ冷靜さを必ず持つべきものであると考へます。

昔から使ひ古るされた比喩を用ひるのはあんまり感心した事ではないと、私も思つてゐるのですが、あの句の場合動詞が省略されてある上に、本當の主格である人間が隱れてゐます。それは伊達卷が藝者を表はし角帽が學生を表はす假偶法によらずして、比喩そのものを直ちに人間のかへ

玉に使つてゐるところから、一讀誰にもハハンと頷いて貰へる比喩でないといけないのです。あまり奇拔な比喩を用ひますと反つて曖昧なものになつてなほさら何の事かわからなくなつて終うからであります。でなければ陳腐なモデイフアイアーはなるべくさけたいのであります。

即興の句

森東魚

奥さんの「きり〳〵す」が大分問題になつたやうですね。亞鈍さんなどはコチ〳〵になつて居られるやうですが小生は、輕

畫の夢きたない色もついてゐず

句主 顯

民郎＝やすらかな畫の夢をもつものゝめでたさを懷ひます。麗に見えるやうな、また見えぬやうな「色」であります。淸らかで、せゝこましくない色。「ついてゐず」と云ひ放つた切實感に私は快さを味はつてゐます。作者は他の句にもあるが「色」といふものに關心を覺えつゝあるやうです。

久米雄＝面白い表現ですね。平和な畫の夢をこういふ風に表はせるとは。

水車＝きたない色もついて居ず、とうまく表現した作者の瑠境がうかゞへます。おそらくは職務からのがれて休暇でもあらうか、まどろむ一と刻、色のない感覺的にうつくしい世界に幸福を見つけたのは纖手であります。

山雨樓＝この句の場合場所とか環境のことは考へない方がよいのではないでせうか。それよりも夢を通じて現實に對する呪ひと云ふか理想觀といつたやうなものを聞取ることが出來ます。叙法が消極的で弱味を感じますが、あきら君らしい純なところがいみじくも出てゐます。

五健＝畫の夢……作者は何處で詠んだのかと一寸疑問を浮かばせましたが、味つて居る内に全體の澄みきつた快よい響きが、これ以上詮議の必要はないこれでいゝのだと思ひました。

山雨樓＝次は僕が提出致しませう。

名を書いてお待ち申してゐる燒場

句主 某人

山雨樓＝阿倍野葬儀所などのやうに多忙な燒場になると、葬式の事務もスラ〳〵運ばれ、先方で次々と手を受けて待つてゐる有樣には、悲しみと腹立たしさと、輕いユーモアとをごつちやにしたやうな感じを受けるものであります。この句からはユーモアと人生の終點符を見せ付けられ、人生のあはただしさを背負はされるやうな氣が致します。ユーモリスト某人君はこんな句が實にうまいですね。

五健＝山雨樓さんが云ひつくして居ます。

水車＝中七が生命でしよう。其の燒場にも特等から一二三等とある。病院での階級は是非がありませんが此處だけは何とかしたいのはユーモアに盛つた作者の意圖と同感です。

久米雄＝名を書いて……と讀んで行つてさて最後に燒場と殘酷に？止どめをさゝれたのには驚きました。「ゲームセット金欄の布掛けられる」、（某人）の句と思ひ合はせて、人生の無情の中に輕いユーモアを感じさせられます。

民郎＝あまりにも痛々しいこの句に接した時、人間はこんなにまで冷やかな感慨を尖らさねばならぬものかと嘆じました。これは輕いユーモアかも知れぬ、作者は凡手でないかも知れぬ。私には好きになれない傾向の句であります。

山雨樓＝民郎さんらしい言葉ですね。

ふとん綿いつになつたら變へるのか

句主 綠雨

五健＝淡々の中に「アッ」と云はす力が集結されて居ます。さうして其の集結から物を通して放射されて居る「味」は流石に綠雨さんだと敬服させられました。ジワリとイブシ銀の底光を感じます。但し「變へ」を「更へ」と致しましたら如何でせうか、字の强さは變へにありますが……。

民郎＝そこに綠雨さんがあるのです。實に淡々たる句風のうちにおぼへる滋味は掬すべきでありませう。

水車＝口語體は氣を付けぬと鼻持ちならぬものになつてしまひます。疑問詞で止めたのが利いて居ます。しかしこゝでは詠嘆的です。「變へ」の方がよいと思ひます。字の强さはやはり變へにありますまいか。

山雨樓＝僕はこの句は一つの思ひ付に過ぎないのでないかと思ひます。寓意的に解釋しない限り句主のある感懷として受取る迄であります。寓意的に見るならば、僕はかつて大阪にゐるとき一ト所に二十年勤續したのであるが、時々はいつになつたら轉勤出來るのかと思つたものです。現狀には別段不滿はなくても變化を求むるのは人情です。性格の根强い綠雨兄にも斯うした變化を希つてゐる一面はあることだらう。さうだつた、綠雨兄には寓意的な名句「玩具屋の虎だけ首を振つてゐる」がある。

人生觀

さぼてんの平凡さあり生きて居る

句主 桃水

五健＝變哲もないさぼてん、樂に云ひ放つて居りますが、よく凝視た句だと存じます。ほつたらかしの水もやらないさぼてんが青々と生きて居る「可憐さ」の情がフト起つてくる。一つの物に對する心の動きが樂々と纏つて深さがあります。「人生觀」とありましたが、私はそれ以外の教示や諷刺や暗示などは考へないで、いゝのじやないかと思はれますが如何でせう、この驚きと感激の裏ににじむ情、これだけで結構だと存じますが……

久米雄＝面白い句だと思ふ。さぼてんよ、俺もお前と同じやうに平凡に生きてゐる人間だよ。さぼてんと自分との共通點——人生觀とも云ひますか——を發見して、そこに一種の慰めと輕い洒落とを見出した句。

水車＝魁偉な姿こそさぼてんの全生命です。一見醜魁に見えてゐてそれで平凡が伴ふ、もり〳〵とのび上つたさぼてんのどこか超越的な姿、しかも砂と水とで生きてゐる生活力の旺盛なこと。人間は自然に生き自然に敎へられるのであります。

民郎＝人生觀とやらをさぼてんの外貌に置き換へた人間の輕々しさ。さう見ようとせねばならぬのが川柳人に與へられた常道なのでせうか。ときに私はさびしく思ふ。もつとおほらかになれと叫びたくなります。

山雨樓＝僕はまたさぼてんの飾り氣のないい〳〵しい純な姿を好もしく思ひます。少しも身邊を飾らない、それでゐてどこか間の拔けたやうなのつそりした姿にユーモラスな親しみをさへ覺えます。句主も斯う云ふ生き方に共鳴を見出したのだら

い即興の句で、「シャツ着たキリ〳〵ス」と云ふ言葉に童話の世界の氣分をうけとればそれでよろしいのだと思ひますし作者御自身も朗かな童話氣分に滿足して居られるのだらうと思ひます、矢張り蚊帳からの連想はきり〳〵す籠を想ひうかべてよろしい、その蚊帳を外からのぞいて、「ハハシャツ着たキリギリス——」と即興した處に朗さがあるのみでよろしいのでせう。

女こしての義憤

米本貴志子

待ちこがれた雨も二三日ふりつゞくともうお陽さまが戀しくなります、奥樣には不相變御元氣にお働きの事と存じます。扨て只今七月號の御誌を得て、奥樣の初蚊帳の御句に對し大分あけすけな御批評があつたやうに拜見いたしました。

私は亞鈍さんといふ方に一面識も御座いません、從つて御批評のかげにこもる御感情と云ふものに適切な斷解は下し得ないとは存じますが、その仰しやるところは日頃崇敬する先生に對し奥樣が例令お心易立てにしろ一匹の虫けらにたとへられると云ふユーモアをとらへて、之は男性を輕蔑するものだと云ふいまいましさが押さへ切れないものとなつたのだと存じました。

言葉づかひが下品なとか文法がどうだとかありますけれど、要するに男の優越感を先生御夫婦によつて損ねられた一種の義憤と見受けました。

キリギリスを殿方におき替へた丈で男性の滿足感を滿されるとすれば男と云ふものは案外に組し易いと云ふことになりはいたしますまいか。

私は最初このお句を拜讀いたしました折、蚊帳の中に偶然入つて居たキリギリスに翅がすがつく〳〵しい夏のシャツに見えたと云ふ凝人躰？ の寫生句だと解し自ら夏の夜の涼味が涌き出づる思ひがいたし三讀いたしました。ほんとうに人樣の句を味はふとするには一切の理屈も見解の相違も拔きにして涌きいづる句情にひたり得ればそれで充分なのではないかと存じておりました。句意に起る疑問はやむを得ないにしてもやたらに自己の感情に訴へて酷評はさける可きだと私は考へてをります。

差向ひ亭主の前の皿の數
晩酌へ妻はちいさくかしこまり

こういふ家庭風景を得々として喜んでゐられる旦那樣方が案外に多いのではありませんでせうか。やれカメラだハイキングだと自分許りが西洋文明を謳歌している男性の中に女大學式の奥樣を望まれることの矛盾をちとお考へ頂きたいものですね。

ウツカリトしやれも云はれぬ夫婦中

右一筆考へいづるまゝを文しました。一寸の虫にも五分の魂ありとかにて私も女としての義憤を感じ一筆奥樣まで論じます。では時節柄おだいじに。

——七月一日——（酉乃女史宛書簡）

（路郎主幹宛書簡）

うと思ひます。

逆境の笑ひ聲までかすれて來　句主　春集

久米雄＝腹の底から笑へないのです。心にもない嘘も交ぜて語る不遇な人か、笑ひたくないがつひ笑はねばならなくなつた。逆境の笑ひをまとめて、辛辣にして妙。

民郎＝何かしら貧相な、後味の悪い氣持を抱きます。この句の構成の分析をする前に、私は先づそう感じてしまつた。

山雨樓＝さう短氣ではいけませんね。川柳は乞食でも泥棒でも貧乏でも借金でもいゝのです。素材如何よりもその扱ひ方感じ方、表はし方にある筈ですこの句大變面白いところを摑んでおり穿ちの中にユーモアを傳へてゐると思ひます。流石にお醫者さんだけあつて臨床的觀察の鋭さが頷かれますね。

五健＝先日ラヂオで笑ひにも六十幾通りあると笑ひの一つ一つの修業を話して居ました。この笑ひもムッカシイ笑ひですな辛辣と云ふより人世の營み、社會の風波を潜ぐ物の哀れを感ぜさせられます。

水車＝逆境と笑ひ、笑ひは遂に涙であることを教へてくれる。作者の狙ひが其邊にあると觀ました。自己を僞ることは一番苦しいものです、一歩誤ると此句は甚だ危いものです、その一線を保ち得た句です。

抽斗の始末もせずに死んで行き　句主　しとし

民郎＝こゝに人生がある。いつ死んでもこゝろのこりのない身だしなみを求める。塵ひとつない置物で死んでゆかう。それが先師の教へられる死の意義かも知れません。だがこの句の訴へるところは「川柳味」であります。教理の代辨でないところに私は推賞するたしからしさ——川柳味をつかみます。

水車＝ありのまゝであり得る人は眞に幸福です。しかし几帳面な人が悪人だとは云へませんが、辭世の句を殘すより偶然の句が辭世になつた方に妙味があると云へます。此句から受ける感じは必ずしも右の偶然的な意味はありません。作者の思ひやりを詠んだものと思ひます。

久米雄＝死者に對する輕い非難がないとも云へません。又整理する暇もなくて死んで行つた故人の抽斗に再び悲しみを蘇らせたとも云へませう。先づ〳〵無難の句でせう。

五健＝高血壓の私も早速、抽斗を始末して置きませう。南無……お茶を一つ下さい。

山雨樓＝寓意的な句と見るべきでせう。只抽斗と云つただけでは色々あつてピンと來ない、恰度借金の始末もせずにと云ふのと同じ樣に。教理とか心構えとかではなくとも、人生とはおよそこんなものだと悟らせる、あの禪寺の魚板のやうな存在の句ですな。

子の顔が笑つてくれるから强し　句主　明坊

久米雄＝世相は愈々繁雜を極める。いくら氣の强い男でも又かと思ふことしきりである。いはんや氣の弱い人に於てをやです。病氣にでもなつて居れば尙更であります。が、無言の中に慰めてくれる、元氣づけてくれる子供の笑顔に男一匹大きな刺戟を受けて靴の紐を結ぶ手付きにも張り合ひが出來てくるといふ譯です。

水車＝親として責任の重大さを遺憾なく表はした句です。そして强くならねばならぬことをおさな兒から教へられたうれしさが句全體に漲つてゐます。難を申せば下五の用ひ方に今一と息を望みます。

山雨樓＝同感ですね。但し下五はあれでいゝと思ひます。

民郎＝よく見せられてきた題材である。もつとうまくこなしきつた句があつた筈だ。

五健＝子の笑顔と生活感情、相當云ひ古るされて居ますが、然し云ひ古るされたからとて、其れが題材に成らぬと云ふのでは無く、既に名句が澤山あつた樣に思はれて響きが尠ない。つまり材料損と云ふ。妙な言葉ですがその……作句技術の問題に落つきますな。此の句は强しの結びで脈を打たせて居ます。

要らぬ子と生れて父の名も知らず　句主　一浪

水車＝生れ乍らにして人生悲劇の主人公とはなる。桃色遊戯の果ての無責任。上五に多少やりッ放しの點もあるか、描寫の苦心がうかがはれます。遠いハワイから寄せられる作者の一異色を感じます。

五健＝社會の暗い一斷面を見せて何だかこう公憤を煽り立てる樣な、川柳ならこその力があります。

民郎＝社會悪を見せつけられて、川柳人がものするところに畢竟川柳人の宿命がある。古今を徹して絶えぬ題材なのであります。

久米雄＝要らぬ子で意味は解りますがも一つ消化されてゐない憾みがあります。上五推敲の餘地はないでせうか。

山雨樓＝句想が概念的ですね。事柄としては特異性、深刻性、暗黑性を帶びてゐるが、問題の捉へ方において獨自性を持つてゐないと思ひます。賣笑婦などに生れた子ならば父の知れないのもありさうな事で別段耳新らしく響かない。その意味で陳いと云ふ事も出來ます。句集「果卵の遊び」にはこの句に似てしかも深刻な表現に成功した句がありますよ。一浪氏の句には他に女性を課題にした佳吟が尠くありません。

停年に落つく故郷の雪深し　句主　柳兒

民郎＝作者と私とはおなじ信州人であります。しかも柳歴は作者の方がはるかに古い。平凡な句に見えてゐて「雪深し」に鄕土信州をふまへて動じない。隱栖した人物の老いと雪國の風景は私の夢にしん〳〵とあゆみよらう。作者の句風は敢てあたらしさを追はぬのであります。

久米雄＝停年で辭めた人の心の餘裕と落着きとが下五でよく表されてゐます。山國の人の氣持、大雪に閉ぢ込められて越年する人の氣持——は體驗はしま

同舟近詠

松山　前田五健

勉強の子に防空の灯の置き場
遮蔽幕暗いとこからお茶を出し
雨までが配給式と鍬を置き
蚊帳廣し凸凹にして子は達者
友達のよさよ昔の綽名呼び
花ざくろ朱し拭ひの刀の尖
錄音をとるに口紅塗り重ね
眉毛長し猫よおまへは長命か
電擊のそれまで忍ぶだけ忍び
馬鹿にされ偉い人にもされて無事
無いと答へにやり〳〵と持つた奴

兵庫縣御影町　長崎柳秀

照れば照り降れば續いてまゝならず
ボーナスを妻に話して醉うて居る
ハイ〳〵と母は受驗へ逆らはず
よい顏をしたがる女異母育ち
宴會の馳走妻子に濟まぬやう
Aランチ飯は矢張り泰米か

友人某氏阪大教授に進むをことぶきて

當然の辭令を母は待ちこがれ
參内のやうに女房手をつかへ
榮進へ妻の磨いた靴の艶

神戸　潮田明坊

書籍のみ殖えゆく中に多病なり
同病の砂に坐つて海へ向き
胡瓜もみ妻に暑さを犒はれ
古典趣味濃き茶が好きになりにけり
大阪の文化鍼灸師で流行り
戰爭はいつ頃濟むかスフの穴

せんが充分想像がつくものです。

水軍＝これは必ずしも悠々自適とばかりは受取れません。停年と雪とに何か事件的なにほひがないでせうか。故郷の雪が餘生の好伴侶であつても悲劇の添景でないことを祈りたい氣がします。作者自身のことゝすれば斯うした落着いた句風は成程とうなづかれます。

山雨樓＝句に個性が躍動してゐない、稍類型的な感じが致します。どちらかと云へば俳句の感慨に近いとも云へませう。

五健＝一茶のお國、一茶の句を思ひ出させます。しつとりと寂悠的な短册に記す句でせう。短册と申せば柳屋で發行の誌に他とくらべて川柳の短册はどうです。これは句の内容と川柳人が無雜作に並短册に書くのと、句が歪められた主觀だつたり（皮肉と云ふ笑はさんとしたり（輕味お可笑味と云ふ）單なる概念であつたり、こゝらに主因があるのではないでせうか。教科書に採否の問題だつて純眞な少年少女對手にはあまり率直過ぎる。キツイのは敬遠されるのではないでせうか。立派な川柳も澤山あるのに、川柳社會進出問題として考へさせられるじやありませんか。いやどうも脱線致しまして……。

山雨樓＝ではこの邊で句評を終ります。有難う御座いました。（山雨樓幹選）

★戰線將兵の活字飢饉に「川柳雜誌」を慰問品として御發送になりたい方は（一）柳誌慰問發送者名・雅號・住所（二）慰問柳誌の受取人の氏名隊名又は住所を明記（三）「川柳雜誌」の號數部數誌代前金（郵稅本社負擔）で本本社内柳誌皇軍慰問係宛に御申込になれば本社は代理發送の手續をいたします。一部からでもお取扱ひいたしますが二千六百部に達したら打ち切ります。慰問誌發送者及び部數を毎號誌上に發表いたします。至急御申込み下さい。

戸田孤篷氏二〇部（七月）　戸倉普天氏一〇部（七月）
田邉由布氏　二部（七月）　麻生路郎　五〇部（七月）

建國二千六百年記念「柳誌皇軍慰問」

一問一答

愚問には答へず一度答へた問には答へず　――係――

問。貴社では川柳懇話會の主唱する紀元二千六百年を奉祝するため橿原神宮へ川柳奉献を何故されないのですか。

答。川柳懇話會なるものを認めてゐないからです。（本誌の卷頭記事「川柳人と時局」を參照）川柳懇話會とやらは吉井勇や食滿南北や山口艸平の諸君を顧問に戴いたお道樂の會だと仄聞してゐます。

それに我社では奉献される奉祝句を文學的に觀てそれほど高く買つてゐません。古來奉納額に殘つてゐる句に名句のないのが立證してゐるやうにお思ひにはなりませんか。それに川柳懇話會の人々を敬虔な敬神家だとは思へないし、集印道樂の兄弟分のやうなことをすることは神宮を冒瀆するものだと考へて居ります。

我社では眞に敬虔な氣持で皇紀二六〇〇年を奉祝された作品は主幹の選を經て誌上に謹記することにいたして居ります。

問。「各地柳壇」への掲載は支部の句に限るのですか。その手續きを聞かして欲しい。

答。支部でなくても、同好者の團體の句なら掲載いたしますが誌面に限りがあるので、選句整理をして發表することになつてゐます。幹事は各地柳壇の發表形式に清記して投稿願ひます。

問。一路集の句は締切に遲れた場合、全沒になるのですか。

答。一路集の句はそれ〴〵選者の手許へ送つて選を願ふのでありますから、遲れぬやうに注意しなければなりません。萬一遲れた場合は「近作柳樽」の方へ廻はしますが、そんな場合「近作柳樽」で拾はれることは稀れであります。

問。不朽洞會員の句集が出版されるやうな事でありましたが、何時頃發行されますか。これから不朽洞に入會させていただいても、その句集に入れてもらへるのですか。

答。不朽洞會の時にそんな話が出ましたので委員で具體案を練つて見ましたが二〇〇號記念に出版するにしては句の分類や、路郎先生の校閲をうけたりするのに時間がかかつて、迚も間に合ひかねるので、中止することにいたしました。

問。「川柳雜誌」のバックナンバーが欲しいのですが、あるでせうか。又幾らですか。

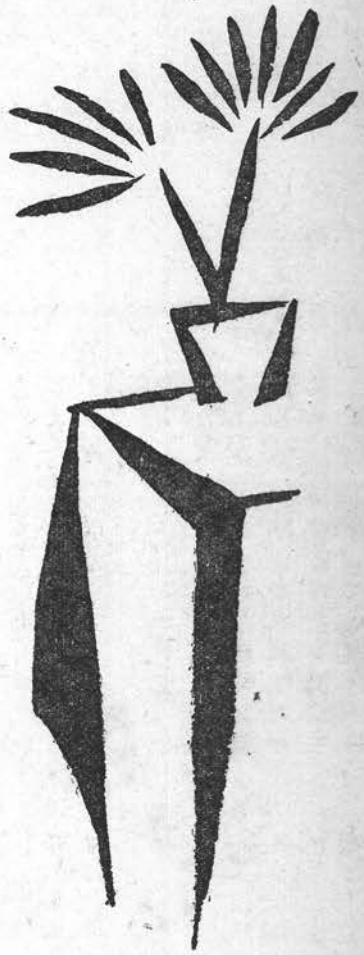
答。バックナンバーは全部揃つてゐません。何卷何號があるかと往復ハガキで尋ねて下さればすぐさまお返事いたします。その號によつて値段は違ひません。バックナンバーでも專門誌のことですから定價通りです。二年も三年も前のものですと、割引があります。合本の殘本もあります。この方が比較すると經濟につきます。必要な卷をお尋ねになれば有無と値段をお知らせします。

問。「裸の句會」とやらへは、一讀者でも行つてもよろしいのですか。

答。差支ありません。せい〳〵柳友を誘ひ合せて參加されたい。

近作柳樽

麻生路郎選



黒絲を撚つてる様な蟻の列　松山　山本耕一路

油虫疊に渦を描いて逃げ　同

思ひ出し泣きじやくりして戀の蟬　同

串ざしのように梟は枝に居て　同

へらへらと蛭が綺麗な野の清水　同

吋釘目高群ほゞ散らばかし　同

金蠅はチト贅澤な色を持ち　同

月見草曰く又來たハーモニカ　同

貝殼の銀か琥珀か春の海　同

鑑定は夢かと思ふ事を云ひ　京都　福田丁路

聲だけは鈴振る如きお方なり　同

居睡つてるても悪口だけは聞き　同

トランクの大きさ中味怪しまれ　同

存在を示す咳とは氣がつかず　同

三段に竝んで寫す大家族　同

母親を狼狽させた擧手の禮　同

奇蹟にも治つた禮の服を着る　同

ウキンドへ蚊トンボに似た我姿　大阪　橋本美奈子

考へてゐるのに八百屋ナニシマホ　同

老人を抱く様にして交叉点　同

蜘蛛の巣を大掃除まで助けとき　同

御隱居に毛虫を殺す用があり　同

死んだつてさびしくはない一心寺　同

佐藤博士へ

全女性の敵悠々と脈をとり　同

何ごとぞ別れしおんなうつくしき　岡山　鈴木九坡

くたびれた帽子よお前もボルサリノ　同

代用品の代用品を買はされる　同

子を抱いて來ればむやみに取り卷かれ　同

ステッキが荷物になつてゐる若さ　同

昇給へかゝはりのある碁を習ひ　同

悪友も出來た青年學校令　同

旱魃が娘に三味線を握らせた　廣島縣竹原町　西野みづほ

ま、母の眼にも吾が子の方が無理　同

子規の氣になつて闘病やり直そ　同

胸病んで啄木が好き子規がすき　同

病院の午後そろばんの音もする　同

百合の花病む娘へ白う〳〵咲き　同

女給する顔に姿になつて來る　京都　小坂ふじ彌

言譯けを考へて來て云ひそびれ　同

ツリーストボーナス月と思ふなり　同

班長に讀めと云はれた女文字　同

歸還兵三年前の値を思ひ　同

軍事劇征けぬ身體でよくつとめ　同

鶏曰くそんなに卵生めません　和歌山　秋月宏方

別荘は寂て山が見え海が見え　同

見えすいた嘘を聞くのも面白く　同

伴奏の様に女湯子を泣かせ　同

打水を蟻天災とあきらめる　同

節電に關係もなく螢飛び　同

嫁の名が又老人の氣に入らず　兵庫縣　岩崎水虹

裾模様今日はハンカチだけを持ち　同

屆書が無くては濟まぬ世をなげき　同

奈良に遊ぶ

ヒスの眼に奈良の都の青いこと　同

鹿の眼に鹿せんべいが賣れ殘り　同

愚談

小畑自由朗

名聲

町一番の名醫の娘が二人迄も肺病で死んだ。だが先生の手腕を云々する者もなく、依然としてはやつて居る。同じ町内のアイスケーキ屋の子供が疫病になつて避病院へやられた。而し間もなく癒つたが、全々賣れなくなつてしまつた。

養ひ難し

二合の晩酌を一合にすると、二た晩へ引き延ばせるから大變節約の樣に思へるが、而し其れで醉はないとすると却つて無駄な節約に終るのではあるまいか、とこれは路郎先生の名論である。それをつゝしんでお聽きした不朽洞會員の某氏が、早速其の名論を奥さんにとき聽かせたさうだが『一合の生醉ひだと其儘家で寢て仕舞ひなはるさかひにやつぱり得だつさ』と否定したさうである。

同情

酒屋のおばはんに、外で呑み歩く亭主のことを愚痴られたら「なんちゆう不經濟なことをしなはんねやろ」と氣樂に同情して上げられるが、これが女郎屋のお女將さんに浮氣者の亭主を愚痴られたらさうはいくまい。

鯖を讀む

始りイーでまづ一匹を胡麻化し、三つツヤー〳〵と同じ數字を繰り返す内に又一匹、この調子で最後にまだ、これでもう仕舞ひとまた一匹、これは明治初年、吾善良なるアイヌ人に、吾賢明な内地人が用ひたテであるさうだ。

易者

他人の運命ばかり占はずに、ちと自分の運も占へばよかろうにと、易者の愚を笑う人があるが、易者に云はすと、他人の運ばかり占つて生計を營む可しと易に現れたのが自分の運命なのださうだ。

古人嘘を不言

桃は二年目に栗は其年に、柿は四五年目から實が成りだしたので、古人は嘘を云ふ哩と思つて居たが、よく考へて見ると、それ〳〵苗屋で相當の年月を經てきていることに氣付いて成程と思つた。それにつけても、龜の死んだのを見て、萬年も生きるなんて嘘だと云う人があるが、つまり其れが萬年の壽を全した死であるかも知れない。

賢答

やう儲りまつか、と問はれていやああきまへんわ、と答へると、そんなことおまへんやろと、たいがいの奴がからんで來るから、へい、儲かります、と

奈良ホテル

古への夢はホテルで見るこする　同
病妹へ茄子なか〳〵見付からず　愛媛縣大洲町　上甲可洲
ハンドルは兩手で持つてゐてほしい　同　同
頬紅もはでに家出の娘が歸り　同　同
足の爪切るに女房向きを變へ　同　同
二十八自活する氣のミシン踏み　同　同
マジノ線守り續けてゐる二人　同　同
値が上るかこ買溜念を押し　廣島　大森風來子
なんぼでもおごらす女ほれてゐず　同　同
おそる〳〵君マッチがありますか　同　同
弄ぶ方が純情型に出來　同　同
朝鮮語子に教へずに育ててる　同　同
だしぬけにYESこ言つた娘が走り　同　同
外米の腹で青年團の喇叭　大阪　柳大門
赤兒眠るスフの不平も申さずに　同　同
卷き出した管が近衛こ呼びすてる　同　同
寫生してるこ知るや知らずや鶴歩み　同　同
事變前のもの今更に鍬をかけ　同　同
外聞もなくタイピスト素足で來　岡山　本田靜江
ワイシャツの皺節電のせいにされ　同　同
ふたりきり星も話題に入れました　同　同
美容院わたしも女であつた筈　同　同
見合寫眞人形めいた顏にされ　同　同
私生子を世に出す遺言だけだつた　尼崎　山田南濃路
無事歸還したらこ良緣斷られ　同　同
憎くまれぬやうこは妻も老ひたるか　同　同
補充兵妻のあるのを躊躇せず　同　同
枇杷の實の丸さ大きさ戀を追ふ　同　同
金になる詩も創れずにやせて居る　山口縣　三原狂路
何時からか妻はゆがんだ眼鏡かけ　同　同
汗ふいてベットの上も九十度　同　同
すら〳〵こ電話で決る暗相場　同　同
其の上に眼を旅先で病む遍路　同　同

退院召集解除（二句）

禮云へば看護婦さんも涙ぐみ　兵庫縣　酒井美知夫
思出の髭を落せば子がなつき　同　同
謙讓の美德がすしを食ひ殘し　同　同
これだけの廣さで出來る子の野球　同　同
見合して來たこ面會笑はせる　名古屋　鈴木可香
お氣に入り社長夫妻の惚氣聞く　同　同
女將の苦情稅金がゑろおます　同　同
ほこぼぎす夏は妓に明け易き　同　同
借る話少し歪んで座るなり　同　同
墓詣り墓に落葉のあるもよし　同　同
蠅ですかこ女中の線は太いなり　大阪府高石町　米本貴志子
家具調度置き變へて見る日の永さ　同　同
贅物が眞に迫つて物さびし　同　同

さとうマッチ切符制となる

全恩は皆一樣に扱はれ　同　同

政變國へ

しくじつた責はしづかに魚籠を提げ　ハワイ　須藤柳村
妹の器量を姉が鼻にかけ　同　同
理由もない錢を娘が握らされ　同　同
戰友は互に何か賴みあい　同　同
蔭口を親切らしくまたきかせ　同　同
新聞にラジオに砲聲きこえそう　同　同
信心をせよこは母の智慧でした　西宮　飯尾寄與史
氣にすなこ氣になる事を云うて去に　同　同
逃げるから金魚いぢめてみたくなり　同　同
押のけて乘つて押のけられてゐる　同　同
御子息が其の御子息が前科者　同　同
懸命な乙女の嘘を聞いてやる　豊中　阿部閑生
父が振る旗一つきり汽車動き　同　同
弟の戰死報らせてなほ進み　同　同
古里へ來て米倉をそこ覗き　同　同
小林一三歸朝後に書く種だらけ　同　同

米饑饉（二句）

乞食なにか喰へり已よりよろしき日　朝鮮　松田幸士
米を得し朝なり妻も薄化粧　同　同

離別（二句）

野はひそか音なくハンカチ振りあへり　同　同
二人來て一人こなりし芝にねる　同　同
逢へさうな豫感心齋橋歩き　大阪　平川久枝
旅立ちの朝は荷車だけ通り　同　同
產月の友は都會の灯を云はず　同　同
一應はここはつて見るボチ袋　同　同

川協のページ

（通信歡迎）

▼小林文月君（尼崎）は最近義弟の戰死の報を受けられたとの、護國の英靈のため謹んで冥福をお祈りする。

▼尾崎綠柳君（松江）は陸軍病院内に柳友を得られ、病院裏へ句帖を携へて二人で靜かに句吟をされる事もあるとか。

▼佐々木三福君（大連）は一日安東に行かれ大工場が續々と建設されてゆく大東港築港よりのお便りの中に「眼に浮ぶ大葦原の上の街」とあつた。

▼潮田明坊君（神戸）は御病氣全快され一日から勤務されてゐる。

▼上田不競君（愛媛縣）から梅雨の晴れ損なひの暴風で十五日は答へておくに限る。

貞夫

五人の兒供を殘しておばはんに死なれたおつさんは、後添ひももらはんとようやりなはると皆ンなから感心ばかりしてもらつて、誰れ一人後添ひを世話しようと云ひ出してくれる者はなかつた。

結果

町内の夜警詰所で、あんまり話がはづみ過ぎて居る間に、門口につるして置いた火の用心の大提灯のローソクが倒れて、三軒のまる燒きと、一軒の生燒きを慴へて仕舞つた。

大洲も五日は十八九メートルの强風であつたと通信があつた。

末尾に强力內閣の出現を熱望します。「大命に決意を秘めた曆の眉」と書きそへてあつた。

▼月原宵明君（北支）から暑中見

三越川柳會五周年記念句會の盛況（大阪中央公會堂にて）

肖像畫揮毫御希望の方は川柳雜誌社までお問合はせ下さい。故人の場合は寫眞、定紋、勳章等お知らせ願ひます。揮毫料其他については御相談に應じます

川柳雜誌社氣付

柴谷宰二郎

肖像畫揮毫頒布

夢までも貧乏人ミ金持ミ　大阪　富岡巨人
ビヤホール物足らなくも腰をあげ　同
外米で體位向上出來るかね　同
國防婦人よ紋付脱ぎ給へ　同
今日は又何を怒つて居る風か　福岡　大西洋
道樂でない魚釣の眼のくばり　同
寢言迄兵語になつて二年兵　同
母校又負けてる記事に秋靜か　同
風鈴にこゝちよく子ミひる寢する　大阪　上沼凶人
人事課長モーニングで來て誰か死に　同
淋しさは玄海灘を越す切符　同
ホッペタの子の飯粒を母が食ひ　同
海かなし打ち揚げられし位牌なぞ　大阪　公木示右
くろ髪よあを蠶豆の匂ひする　同
飛行機を見てゐて牛に寢そべられ　同
女事務事務窶れして退けてくる　同
親に似たミころを親が齒痒がり　兵庫縣加古川　水田光哉
金策の首尾女房はききもせず　同
兵隊が通る二階の窓があき　同
咲いてから妻も馬糞をあつめてき　同
借本へ意外な祕密見てしまひ　廣島　石原伯峯
相對性原理離緣に異存無し　同
適令丸刈となる
五厘刈デコデコがあり禿があり　同
檢査場にて
インテリミ言ふは近眼鏡をかけ　同
パーマネントクラスメートの僕と云ふ　松山　芝田靈子
內容はそんな譯さミ猪口をさし　同
立ち話オクビソデタケツマアガリ　同
旅へんろ雨に堂々たる合羽　同
託兒所は大人が居てもよいミこころ　愛媛縣大洲町　米澤曉明
課長留守女にこんな聲がありもう派手な柄ミはなつた鏡かけ　同
海廣しもういざこざに觸れまいぞ　同
古タオル便所に惜しい木綿なり　大牟田　高田抱逸
社の物が木綿であればよく盗られ　同
其の後は看護婦だけで濟む眼科　同
吹出物缺勤をした女事務　大阪　津路紅多呂
病院へ洗濯物をしに出かけ　同
婦唱夫隨で家相見てもらひ　同
不義の子も抱いて呉れたは母だつた　岐阜　市川童顏
この家が借金だミは見えぬ庭　同
同情をされても娼妓されいでも　同
病人ミ聽く雷は屋根の上　東京　內田日出美
ごちや〳〵な荷で東京を落零れる　同
吾が影も涼しきものに蚊帳を釣る　同
久し振り互に孫に手を引かれ　堺　野島神樂
弟の榮轉姉はいかず後家　同
常道をミいて邪道の金儲　同
流浪を容れる銃後の故郷なり　長野縣須坂町　高峰柳兒
鳴る靴へ敵性じみた視線伸び　同
俯甲斐なさを知る單調な日記帳　同
ボリ〳〵煎餅六月の灯に對し　島根縣　尼　綠之助
少し妬け氣味にピントを合はすなり　同
貯蓄そも押しつけられるのが嫌で　同
捧げむは花より白き眞心よ　兵庫縣寶塚　森本秋子
ボートワイン母唇を觸れ給ふ　同
なぞかくも夢狂ほしき乙女なる　同
黑枠に光る興亞の新佛　岐阜縣那加町　藤井紫風
利己主義へちミ反抗をしても見た　同
鉛筆のこんなに溜る洗濯屋　同
英靈の名を呼ぶラヂオへ箸を置く　大阪　西田白雨
慶應へ早稻田へ三三七拍子　同
靑訓のラッパにうたたね起される　同
催促を品切れミいふので歸へし　廣島　得能紫浪
國寶の裏へ廻ればこんなもの　同
女事務理性に勝つて寂しがり　同
一連の雲は故鄉の方へ行く　廣島　大山露斗
夜の蠅神經質になつてゐる　同
給仕ではなさそに見えるパーマネント　同
新兵の步調へ櫻散りかゝり　山口縣小郡　岩崎松翁
盃へ誘ふ言葉の巧なる　同
娘やら嫁やらリボン氣にかゝり　同
姑娘の顏ごこか妹を思はせる　松江　馬田實
支那語なぞ眞似て看護婦罪も無し　同
病死せし戰友の癖眞似て見る　同

柳界展望

全國川柳界のこと各地川柳人の一寨手一投足を此展望欄ですぐわかる樣にしたい皆樣の御通信を歡迎する（係）

催

▼川柳雜誌社例會（七月六日午後六時）
▼松坂倶樂部麻生路郎川柳講座七日、二十一日）
▼有恒川柳會（十一日、二十六日）
▼川柳城南支部生駒吟行（十三日）
▼阪大川柳會（二十五日）

消息

▼勝谷山川兒君（松江）は市廳事務多忙の中から毎月、川雜松江支部の小集を開いてゐられる。今夏中等野球大會には來阪の豫定であると。
▼橋本波夢造君（不朽洞會員）は東京小川病院へ入院されてゐるが殆んど快癒されたので九月頃には歸阪される由。
▼小西無鬼君（兵庫縣）は無事歸還された。
▼橋本綠雨君（不朽洞會員）は七月十五日四ッ橋支部の人達と富士へ登山された。
▼濱田賢次君（不朽洞會員）は德島へ歸省された。八月一日に下關へ歸られる豫定である。
▼高鷲亞鈍君が新谷病院瘍の手術後、入院してゐられたが、七

舞を頂く。遙かに君の健康を祈る。
▼川柳武藏吟社では八月十八日に八王寺市大橫町大善寺に於て故吉本武郎追悼句會を開催される由。宿題「遲れる」「看板」「水」「强い」「惡落」各三句、締切八月十日、八王寺市小門町九五高橋三連星方同社。
▼從來東京から刊行されてゐた「卷雲」を大連の井上鱗二、佐々木三福氏等の手によつて發行することになりその七月號が大連から出た。
▼宮尾しげを君（東京）は昭和川柳百人一句第三篇を目下作製中である。
▼岡山運輸事務所報七月二日の所報雜報欄に左の樣な記事がある。「廣鐵體操普及强調月間」に入るの記（庶務掛）
川柳に「體操は自信あるのが先きに立ち」といふのがある。廣鐵體操が發明されてから、もうよほど年數も經つてゐるし、その間いろ〳〵な催しも繰返されて來たのであるから、いまさら「强調月間」で候の、どぎつい企てをしなくてもよさそうなものをと一應考へる人があるかも知れないが、さうは行かない。事實は「先きに立つ」だけの「自信有る人」が今日未だにまことに少いばかりでなく「自信有る」人が「先きに立」つてくれぬことには、てんでやれない人があちらこちらにまだ〳〵相當あるやうだ。云々」と
句は昨年頃の麥作君の句であるが、岡山運輸事務所は大正末には柳誌を發行してゐた事もあり、川柳に關心は持ちつゞけてゐる。いかめしいお役所のお達しの中に川柳味が盛られてゐる事は面白いと思ふ。とは久米雄君よりの便りである。

南支にて六月十六日義弟戰死す（三句）

弔客が替つて涙あらたまり　尼崎　小林文月
公電をまた讀み直し讀み直し　同　同
記者二人寫眞を複寫して歸り　同　戸奈巳之介
嫁ぎゆく身にもしみ〴〵物價高　大阪　同
あの人は圓いと既に舐めて居り　同　同
禁煙を徹底させる擴聲機　布施　小谷華素兒
小說はすぐアパートを書きたがり　同　奥田綠翠
愁ひ持つ女やはらかき髮匂ふ　尼崎　同
貸ボート一人漕ぐのも淋しまれ　長野縣上山田　佐二木千隈
海遠く雷遠し濱の午後　大阪　金政細泉
百圓の草履に乘せる蒲柳の身　同　同
あの田地賣つた時分の面白さ　大阪　同
ハイヒールまだ金側を手ばなさず　大阪　佐々木指洋
日の丸は校舍の屋根をこえてゐる　同　同

室津沖鯛網所見

櫻鯛さゝげ別れの船がゆれ　兵庫縣　木村染史
大漁ののぼり夕陽へ日燒けする　同　同
電髮は親が好んだ筈でなし　大阪　中西彌生
差向い何かしらんが又笑ひ　神戸　同
暦にも英字の這入る世の中よ　同　橘詰一帆
綱引にスフのバンツも何のその　ハワイ　同
云ひ負けた方が良かつたなと思ふ　同　長谷川猿吉
金になることなら娘遣る氣なり　同　勝山しとし
氣違の苦手といふに犬が居り　石川縣小松町　同
句にすれば人生は唯十七字　兵庫縣實塚　森本花子
シャープペンシル或日は戀の文字も書き
揚卷が似合ふて皆にさげすまれ　同　河合明子
一晩だけ逢うに急行券を買ひ　兵庫縣六甲　同
逢へそうな豫感へ活けた菊の花　同　山川富士
共稼ぎ妻の收入に負けてゐる　大阪　同
三角の戀とは知らず仲にいり　同　吉川琴聲
小說に大阪辯のなつかしさ　大阪　同
買う人によつて金魚の幸不幸　同　今西鼓愁
大佛へルビーの光る手を合せ　大阪　同
歸還していつそ無口な兄となり　奈良縣櫻田町　嶋田翠峯
手淚かむことも覺えた長期戰　同　同
横取りをする手もありき戀愛記　同　西ノ宮　花柳蘭子
日記帳友の惱みのはしに觸れ　同　同
月まるく海は二人のものとなり　神戸　卑上一扇
「子は寢たか」そろ〳〵ぐちを云ひ始め　同　同
日支親善先づ行く中華理髮館　大阪　朝野久人
目覺めない奴もかぞへて支那四億　同　同
貧乏へおちつきのない髯が伸び　大阪　浦島花太郎
親だけに免じて不良無事に住み　同　同
神さんは進化論なぞ承知せず　大阪　大瀨戸翠葉
永屋の店に八ツ手と犬が居り　同　同
嗚呼友の武運祈らむうがひ水　下關　東方司半休
公休に金槌持てば早や暮れる　同　佐藤叫史
阿蘇三原弱い女のゆくとこか　瀨戸　同
連想はこゝで止つた寢白粉　同　佐々木指洋
電話では返事に困る耳があり　大阪　同
夜着のまゝ立話する小火ですみ　同　同
實蹟に三デシ瓶も量の內　廣島　清田田鶴子
良友のゐないさびしさ日記書く　朝鮮金堤　弘津柳慶
執務中ふと冷藏庫の中を思ひ　同　同
虎造に似てる心算でうなつてる　中支　森元宙芥
左遷させといて君の手腕でやつて呉れ　同　同
あんべらに今更ながら親の恩　堺　野島夢め
白衣とも云はず元氣と老母へ書く　同　同
押入れに寢込んだ賊へ電話かけ　同　同
叱られた煙草一口喫ふて投げ　同　同

萬龍湖にて

恐ろしき噂さの如く水がすみ　島根縣　田中弘樓

某家の火事跡を見て

殷盛をのろつた樣に燒けてゐる　同　同
電髮の輕き心を見拔かれる　大阪　藤森小雅子
戎橋ジヤズと流れる貸ボート　同　同
追從は迷惑そうな卷煙草　大阪　堀毛一龜
同職の妻でなか〳〵我が强し　島根縣西郷町　吉田孤舟
ボーナスへラヂオ新聞呼びかける　大阪　横山光枝

松葉杖をつき初めて

今日からはああ此の杖が俺の足　松江　尾崎綠柳
あの人は素の鞘には收まらぬ　堺　村上角堂
日本の强さの中に俺もゐる　佐伯　坂本遠見路
お隣の留守も見張つて子のお守り　名古屋　長谷川可門

月二十三日に退院された。

▼丸尾潮花君（不朽洞會員）は榮轉直後で大多忙の由。

▼戸倉普天君（不朽洞會員）は廣島から山口へ旅行湯田溫泉へ立ち寄り歸阪された。

▼長野文庫君（今治）は石槌山に登り「成就」の宿に一泊「大阪はあのあたりかと山から見」の句をよせられた。

弔

▼中原銃人君（不朽洞會員）の嚴父は藥石効なく永眠された。謹悼

轉居

▼妹尾八九滿君は大阪住吉區天王寺町市電公舍西十九へ

★社告

▼支部の異動

○岡山支部新設（幹事鈴木九坡君）

○十三支部解消

▼左記の諸君が不朽洞會へ入會された

ホノルル　藤井友郎
下關　濱田賢次

▼北幹夫君入社。七月九日から編輯部に勤務。

▼七月十二日不朽洞會第一回の委員會を肥後橋サロンで開き、不朽洞會規約の件、皇紀二六〇〇年奉祝と「川柳雜誌」二〇〇號記念の件について懇談された。出席者（路郎・普天・孤篷・紫香の諸君）

▼七月十四日第一編輯日、夕刻から、紫香、水客、春巢夫妻、の諸君と路郎夫妻と北幹夫。

布哇の柳友たち

川古・浪一澤高・海北山前（列前）石山崎岩（列後）向かつて右から
竹風・小田淵喜太郎の諸君

水虫
新治療劑
セイロポン
ハイシクミ
ンラヅム
タキク
ケンモサシ
痒し痛し セイロポンで 掃し
一町野平區東市阪大
發賣元　白井松新藥部
振替大阪六六六八四番

貝釦（續）

岡田某人

さて逢つてみると別に言ふことなんてないものだ。あるものは無駄口とお產なり。だからあんまり人には逢ひたがらない方がいゝ。

※

花時分の夜の冷い風。これ位春らしいものはない。

※

曇つた春の朝。時々雲のうすれ目から明るみがもれて、白い建物だけがポツカリと浮いてみえる。お化け繪みたいな風景。板へエナメルで描いてみたいと思ふ。

※

一しよにめしを喰つたり、茶をのんだり、これはつまり、てれ臭いからなんだ。

※

打ちとられた猛獸。實にだらしない。何とあの豹が、コーモリ傘の袋のやうになるんだからな。

※

詩がなんでえ。小說がなんでえ。結局すきなことをするばかり。本にしようと何にしようとそれは本屋の仕事だ。人がよろこぼうが胸くそを惡くしようがそれは他人の勝手だ。誰が君、ヴイタミンの蛋白のつて考へてにわとりが卵を生むものか。

※

愛書修羅。いまだ消えやらぬ妄執の……か。この分だと、幽靈になつてからも本屋をうろつき相な氣がする。

※

本屋。それも利益なんて度外視した美しい本を出版する店がやつてみたい。その資本を作るためなら、少々の惡事位敢て辯するものではない。

※

良書推薦。その前に焚書並びに、出版屋を皆殺しにする必要がある。

※

田舍から送つて來るもの。第一に香り。第二にこゝろ。第三は、風景だ。

※

高原物語。——牧場のことを書いてみたい。朽木峠かあんな背景。

※

旅を思ふやしきりなり。手續き、これなくんば……。

——御入院には——
——ご需めに應ず——

醫學博士 谷内與一郎

谷内小兒科病院

大阪市港區市岡元町一丁目（電車道）
電話 西四四八一 八〇三七番

彩票夜話

佐々木三福

お金なんてものは隨分重寶なものだが又一方に於ては世の中のトラブルは皆お金に緣があつて、隨分煩はしいものだとも言える、所がこの煩はしいお金を欲しい〳〵と朝から晩迄毎日追掛け廻つてゐるのが本當のところで、人を押しのけ、眼を尖がらし肱を張つて揉み合つてゐる實狀から考へるとお金の魅力も偉大なりと言ふべきである。扨てこのやうな人間の弱點を甘くねらつて素晴らしい成果を上げてゐるものに滿洲國の彩票がある、彩票とは日本で言ふ富籤の事である、一組が五萬枚で成立ち一枚が一圓で賣られてゐる、毎月甲乙丙丁戊己庚辛壬癸子の十一組の彩票が賣出されるが此金額五拾五萬圓がまたたく間に賣切れになるさうだから、當局者も定めしほく〳〵であらふ。

此彩票は滿洲國經濟部が發賣するもので本當の名稱は裕民彩票と言ふのである。裕民彩票の利益金は施療設備や災害救濟に當てられるそうで、其間少しもインチキ性は無く、毎月十四日には官吏の手で公正無私な抽籤が行はれ、當籤番號は夕刊にのるから、アパート住ひの主婦にも片田舍の王さん李さんにも判きりと結果が、判るやうになつてゐる所などが、人氣の有る所以かも知れぬ。一圓の元金で一萬圓の成金になれる彩票の內容はざつと次のやうな仕組である。

一組が五萬枚だから五萬圓の賣上高となる、其內から、一等一萬圓二等三千圓三等千圓の當籤者が各一名宛、最下等の八等一圓に當る者が四千九百九十名も有るから、一組に對しては三萬圓の賞金が分配される事になる、ところが彩票の亡者達は決して八等の一圓などには目も呉れず皆が皆迄一等の壹萬圓をねらつて買ふのだから其間に色々な悲喜劇が起つて來る事になる。

彩票はあらゆる階級の人に公然と買はれてゐるが、中でもサラリーマン、家庭の主婦、花柳方面の婦女と言つた人達に最も熱があるそうで、苦力などは三人又は五人でお金を出し合つて一枚を買ふとか、何れにしても貯金でもする積りで毎月一枚宛買ふ事を忘れぬと言つた人氣だが、考へて見ると五萬分の一のチャンスをねらふなんて隨分馬鹿な話のやうだが、彩票賣りのおやじさんに言はすと、一圓の元金で一萬圓を占める人が毎月確實に十一名は有るのだから買はぬ人こそ本當の馬鹿だと言ふのである。

彩票が初めて賣り出されてから數年になるが、筆者の身邊にはまだ一萬圓をせしめたと言ふ人を知らぬ、が只一度こんなのが有つた、一等の袖（壹萬圓の當籤番號と一番違ひ）に當つて三百圓儲けた友人が知人を招待して大ひにメートルを上げた迄はよかつたが、後で勘定して見たら五十圓程足を出した上に、飲み過ぎが、元で入院したと言ふナンセンスも有つた、眞疑の程は保證の限りでないが彩票當籤者については色々な話が耳に這入つてゐる。或るコック君は初めて買つた彩票が一萬圓の大當りで、早速想思の籠の鳥を落籍して何々亭を買受け仲のいゝ所を見せ附けてゐるとか、蔦屋と言ふしるこ屋の主人は一萬圓の當籤金をそつくりそのまゝ皇軍慰問金に獻金した事が新聞に出たお蔭で、それ以來店が大繁昌してゐるとか、これなどは我意を得たりと言ふ處分の仕方で痛快な話だ、又こんなのも有る一人の老按摩君にヒョッコリ壹萬圓當つた、所が急に氣が變つて、盲目の上に狂人になつた不仕合せ、こんなのは滿洲ならでは聽かれぬ哀話である。彩票の買ひぶりにも色々ある、輕い氣持で樂しみに買ふのは罪がなくてよいが、最初からきつと當てる積りで、當つた金の處分法迄考へて買ふ連中が花柳方面には相當に有るさうだ、こんな手合

雲中語

寺井鋭々

九州延岡の奥、日向の高千穗町へ行つた時、其處で食べた晝飯が、純日向米の白米であつたので、ポロ〳〵と涙をこぼさんばかりに、喜んでゐる人があつた。しかしこういふ大袈裟な嬉しがりやうは、若し大阪で此の人に、內地の白米のみを與へると云へば、決して大切に扱はないだろうと思つた。

現下、我國の行くべき道と考ふべき理念とを、明確に認識してゐれば、米の旨さ不味さなどは、考慮外の事なのだ。

◈

我家に俵で蓄へてあるからと云つて、今に內地の白米だけの飯を、食べてゐる人がある。

かと思ふと、自分の田舍から幾らでも、白米は取寄せる事が出來るが、都會の人皆が外米混入の飯を食べてゐるのに、自分だけが、不混入の米を食べる事は、忍び得ないと云つて、麥や外米を混入して食べてゐる人がある。

何と、その人格、精神は、月鼈の差以上のものである。

◈

去年の冬は、水不足で、關西は休電節電の慘目な狀態の時、東京では、ネオンさへアカ〳〵と、暖い冬を樂しんでゐた。

今年の初夏は、東京が水不足で、水道が時間給水で、入浴など迚も思ふやうに出來ぬといふ有樣で、悲鳴を上げてゐる。

世の中は廻り持の感が深い。

◈

毎日通る道の、ある角の家の塀を越して、一本の柳が、

ひは十四日の夕刊に載る當籤番號を見て、愈々今月も駄目だつたと決まると、手にしてゐた彩票を八ッ裂きにしぶり〳〵怒つてやけ酒をあほる仕末となる。又浮かぬ顔してため呼吸ばかり連發し、「彩票なんかつまらないは!」などとベソをかく女性もあるそうだが、彼女等はそれつ切り彩票を買ふ事を決して止めはしない。相變らず翌月も一枚買ひ求めて小さい神棚にまつり、お供物迄して當籤を祈る、斯くして彩票は賣行頂好々で有る。(一五—七—七)

冷汗

石崎柳石

話は古いが、旦つ汗臭いが、私には秘話である。毎年六月四日が來る度に、私には冷汗をかく思出がある。と云ふのは、此の日が昨年迄は確か齲齒デーに當つてゐて、日本人好みらしい同音異義に發した此の日をと、特にムシ齒に關する衞生講話が學校で執り行はれたものだ。さあ、今から八年も前になるだらうか、此が衞生講話に當つた理科の一先生から、話が堅苦しくては(齒の琺瑯質は堅い方が良いのらしいが)女生徒に面白くなからうから、君一つ齒に關する詩歌を見出して呉れぬかと、齒に衣きせずに申込まれたものだ。はいの一言に圓呑込みで引受て歸へつたものの、これが文献となると一寸齒が立たぬ。まゝよと、手元の「柳多留」からでもと、やけにめくつて數句引出し、その中からよろしくと翌朝持參したものだ。

所で貴重な授業時間を割いて愈々其の講話が始まつた。さてどんな所へ句が挿入されるのかと、齒を喰ひしばつて傾聽したのは確か私一人らしい。講話は極めて理科的に齒の組織構造から始まつて、二時間も終りかけたが未だその引用にあづからない。奥齒に物のはさまつた氣持とは其時の氣持らしい。次の始業のサイレンが響いた。話も餘儀なく終らざるを得ない。その時壇上から石崎先生に御願して出して戴いた古川柳を紹介致しますとやられたものだ。講堂内は俄然緊張した。

○齒を磨くやつに限つて喰ひつぶし

○よい娘おしい事には齒が黑い

の二句が讀上げられた。第一句が詠まれた折、女生徒はきよとんとして居た。第二句が詠まれた時、どつと笑聲が渦卷き上つた。これで講話は無事終つたのである。

却説、冷汗は人知れず後から流れるものだ。この第一句は、ドラ息子を詠んだもので、江戸時代に齒を磨くやうな奴は伊達者で、家産蕩盡の「賣家と唐樣でかく三代目」此の息子に當るもので、時勢粧は斯く異ると附加へて貰はねばならぬ句であつた。次の句は、鐵漿に關した句で背景は吉原遊里の句であつたとは後で知つた次第、生徒は簡單に解釋して可笑しかつたとみえる。で今に六月四日過ぎると二部卒業の小學校に居る連中から、女學生時代に聞いた先生のお作の川柳を此の日が來ると思出しますとの通信が來る。先生のお作になつたりする所益々以て冷汗をかく所以である。

一路集

募集句

課長

佳作 濤明選

傘のない課長を入れて優越感　青笠
あの地位へ課長夫人の社交術　紫風
案外なところで課長と行き合せ　洋
散髪へ課長も來てゝいゝ日曜　吼城
遲刻して課長の椅子をそつと見る　琴聲
よきパパの課長と逢つた天王寺　斗風
趣味が合ひ課長に日曜約される　美奈子
やさしさはあるが課長はすごい髯　染史
ソロバンもペンも課長の眼をおそれ　一聲
約束は課長で北支を買つて出る　白鷗
大學を出て來た課長の若いこと　富士
青年の趣味に理解のある課長　已之介
眞實に怒つた課長腕を組み　綠翠
肩書に物言はしてる課長さん　翠芳
德望も貫錄もあり老課長　照波
いそがしさ課長の机に蠅一つ　透
榮轉の今日から座る課長席　彌生
課長室私用になんと呼びつける　光哉
禿けて肥つて威あつて猛からぬ課長也　靜觀堂
昂奮をなだめられてる課長室　喜一
細心の注意を殘し課長退け　一龜
じいわりと課長の椅子へかけて見る　久人
洗面所課長の笑顔考へる　三昧
喫煙所課長のニュース持つてくる　南濃路
ひたすらに課長の笑ふ送別會　指洋
公用紙課長時々私用文　夢女
機密費を使ひ課長の隱し藝　神出
關に凝る課長へ近き停年期　北海

五客

ぶちまけて見れば課長は笑ふて呉れ　童顔
女事務課長が怖くない縹緻　文庫
午後三時課長もソッと欠伸する　春雷
汗も出ぬ課長一人の扇風機　抱逸
社長部長課長まだ〳〵遠い俺　秀雄
(人)うつかりと課長の欠伸見て仕舞ひ　寄與史
(地)課長來る廊下を狹く通り拔け　風來子
(天)呼鈴を押して課長の顔となり　みづほ
(軸)課長になつて捌けぬ部下のもどかしさ　同

選後に——青年期から中年期にかけて十數年の役人生活中課長に仕へ課長にもなつた經驗から、この題は特に興味を持つた、天の句は課長となつた得意の頂點であり、地の句は課長に對する敬慶の態度であり、人の句は見てならぬ課長の過ちを見て恐縮する心、その他怖い課長、偉い課長、優しい課長、得意な課長、私生活の課長、課長の裏、課長のアラ等々、或はあつてはならぬ課長の心得などを詠まれ味うべきものが多々あつた。

道傍へ枝を垂れてゐる。

早春の頃、ふとある朝、此柳ももう芽を吹き出したナと思つて見て通つたが、それから直ぐに、ずん〳〵と春は展がつて行つた。

此の頃のカン〳〵照り付ける眞晝に、道端に一つの日蔭を作つてゐる、その青黑ずんだ葉が、同じ柳だ。

自然の生育ほど、規則正しいものはない。

◈

未來永劫に欺む時がないかと思ふほど、ざんざ降りの梅雨の日のある一と時。

商店街の堺筋のある街角の巡査派出所の前。

柳の樹が一本、ゆさ〳〵と枝垂れてゐる。

女の蛇の目傘が、此の柳の枝にすれ〳〵に通つて行く。

只だそれだけだが、雨も好いなと思ひ、柳も好いなと思ひ、派出所などといふよりは交番と云ひたく、巡査とよりはお廻りサンと云ひたく、などゝ考へた。

急性慢性淋疾に

大學、大病院の諸權威者に依て、續々發表される治療例を觀るにアルバジルの連鎖狀、葡萄狀球菌、淋菌、大腸菌等に起因する諸疾患への適用範圍は愈々擴大せられ而も其の効果の優秀迅速なることは眞に賞讃に値するものあり。

—適用範圍—

急性、亞急性、慢性淋疾
中耳炎、膿腫症、耳下腺炎
扁桃腺炎、丹毒面疔、面皰
腎盂炎、膀胱炎、睾丸腫脹

二基ズルフオンアミドの先驅的製品

ルジアルア錠

大阪 株式會社 山之内藥品商會 東京

ALB 71

いのちある句を創れ

各地柳壇

投稿規清

▼用紙は原稿用紙又は投句箋の事
▼文字を正確明瞭に記載のこと
▼開催月日及場所記入のこと
▼締切は毎月廿五日とす
▼投稿先は本社宛

路郎・豆秋整理

本社七月例會（大阪）

七月六日　於　御津八幡宮

出席者（順不同）

路郎・リリ・葭乃・紫香・水虹・鮎美・孤蓬・一龜・龍成・艸樂・普天・斗風・指洋・かほる・豆秋・紅多呂・蜜多樓・獺生・万的・久人・水客・久枝・八歩・八九滿・白柳子・風葉・春巣・一笑・里十九・桃園・默平・潮花

席題「親　分」　互　選

親分の恩がわかつた小商賣　かほる
煙草盆さげて親分逢うてくれ　紫香
親分はおつちよこちよいを一人連れ　同
親分が死んで葬式はでな事　獺生
親分に見込まれてゐる無精髯　万的
親分に任して二人風呂へゆき　水客
親分のカミソリをとぐ流行歌　紅多呂
親分は嘘もチヨツピリ聞いてやり　水客
親分と云ふのは小さい方でした　孤蓬
親分の赤いネクタイ好く目立ち　斗風
親分は少々無理も云ふ男　蜜多樓
義侠心強く親分金がなし　一龜
親分へこんどこそはの詫を希ひ　久人
親分も一パイきりのビヤホール　龍成

席題「雷」　艸樂選

雷が喫茶の窓をこわがらせ　紅多呂
雷へ一本つけて冷奴　鮎美
雷へ裸足のまゝで兒は戻り　久枝
雷の鳴る間よい子になりました　風葉
雷が鳴つても戀がはかどらず　龍成
雷も張り合ひの無いビルヂング　白柳子
お茶呑みに來て雷にあうて去に　同
雷へ暫く會議とぎれたり　紫香
雷にあとすだりする雨宿り　普天
言譯に來て雷のなかを去に　鮎美
雷に思はず嫌な人を抱き　蜜多樓
遠雷へ鼓の音がさえてゐる　水客
御破算をして雷を聞いてゐる　八歩
雷が止んでひまわり西を向く　斗風
雷がすつきり晴れた海でなり　紅多呂
雷へまだ買溜の手をのばし　八歩
雷も問題になる天王寺　桃園
流行つ妓雷さまへ猪口を伏せ　水客
雷が胃病の腹へよく響き　水虹
雷に水族館を出そびれる　かほる
（秀）雷へ酒は二本で斷はられ　豆秋

席題「自　宅」　默平選

高架線の下が自宅の二階です　指洋
ほら云ふて戻つて宅のつまらなさ　八九滿
自宅から電話郷里から老母が來る　斗風
自宅まで來いと辭表を預かられ　艸樂
風鈴へ自宅の風の音になり　八歩
大掃除自宅へ給仕やらされる　紅多呂
自動車を降りたは自宅のちと手前　艸樂
エハガキは自宅の方へとどけられ　一笑
人だかりどうやら宅の前らしい　里十九
自宅父母同居と書いた新學年　水虹
つきとめた自宅に恐い犬が居る　龍成
用度課の名刺自宅も書いてある　豆秋
廻り途自宅から電話とも知らず　普天
その事なら自宅へ來いと課長言ふ　白柳子
いゝ便り自宅の方へ送らせる　潮花
自宅とは五軒長屋の端なりし　白柳子
自宅から生駒も天主閣もみえ　久人
自宅では歌へぬ歌で醉うてゐる　春巣
靴の紐自宅が近くゆるむなり　紅多呂
自宅へ伺ひますと女强いこと　潮花
自宅には犬猫小鳥仙人掌　桃園
（秀）靴下をぬいでつかれを知る自宅　八歩
（軸）自宅では拭いたり掃きもする專務　默平

席題「裸」　春巣選

大臣の裸濱邊で寫される　水虹
主客とも裸になれるとこに住み　水客
眼鏡だけひかる恩師の素ッ裸　斗風
無禮講裸踊りが膳を越え　潮花
甲種合格無理に裸にさせられる　萬的
夏やせをしたと裸を見せてをり　久枝
先づ裸それから話そう君と僕　斗風
御馳走がいつか裸にしてしまい　八九滿
訪へば裸の子供のぞきに來　普天
來客へ課は後ろ向いて云ひ　默平
皇軍の裸ニュースの一こまに　白柳子
（秀）氣の張つたとこで裸をすゝめられ　潮花
（軸）盲腸の創を風呂屋で見詰められ　春巣

相撲吟「男　裝」　互　選

兄さんの上衣を借つて寫される　一笑
少女歌劇シルクハットへしなを見せ　葭乃
洋行にターキー男裝思ひ切り　蜜多樓
覆面をとればきれひな女なり　里十九
パチンコも持つて男裝纒をする　斗風
男裝は姙娠をせぬ姿なり　春巣
男裝は電車の端に立つて乘り　紫香
男裝の語る上海を信じかね　艸樂
男裝も少し白粉はいてをり　久枝
夕立の中を男裝歩るいてる　豆秋
男裝になつてもしるこたべに來る　万的
男裝の疊のへりにけつまづき　水客
男裝の肩のあたりが物足らず　八九滿
男裝の腰は男になり切れず　八歩
（秀）男裝のまゝで女の聲となり　風葉

兼題「赤　帽」　路郎選

あつけなし赤帽荷物さげて行き　万的
赤帽も汗を拭くとき禿を見せ　白柳子
二等車の位置で赤帽待機する　春巣
赤帽の足がびつこなのを見付け　水客
頭だけ見へて赤帽よりつかず　紫香
舊友が赤帽で居る故郷の驛　龍成
赤帽も探して呉れる落しもの　風葉
赤帽の親切素直に受取れず　久枝
赤帽も遙か後で最敬禮　默平
赤帽で猫背でそして齡をとり　紅多呂
ホームの長さへ赤帽の無表情　八歩
捨子とは知らず赤帽待ちあぐみ　指洋
赤帽に持たしともない土產もの　龍成
赤帽一人メリケン波止場の灯にしがみ　潮花
赤帽は米のトランクとも知らず　春巣
（秀）赤帽も走つて呉れた乘遲れ　水客
（軸）子を連れて赤帽のあと追つかける　路郎
持ち逃げのやうに赤帽おもはれる　同

雜川　鐵道病院支部句會（大阪）

五月二十日　北川春巣報

年頃は熨斗へあはてる事もあり　幸路
熨斗袋チト爭つてから渡し　天國
母の留守熨斗の在所が分らない　伯峯
熨斗つけてさて口上を考へる　久米雄
熨斗見つめてる花嫁の無表情　里公
人慣れぬ使ひ熨斗だけ落して來　水虹
間に合せ不得手な筆でのしと書き　九呂平
母の手に小さくのしと書かれたり　不朽
貰ひ物と一ト目で知れる熨斗をつけ　路郎
心づけ草書ののしですましとき　同
來客へ健康さうな子が迎へ　幽香
健康と茶碗の太いのが自慢　市多樓
轉寢の健康な臍出して居り　三公
健康を尋ねられてる遠い耳　春巣
家を越す癖健康にめぐまれず　水客
出しただけ皆食べる子へ又案じ　某人
診察着一年目には髭も出來　久枝

一年が經つて古兵の面構へ　鈴水
二度と無い此の一年を振りかへり　嘘川
花嫁の後姿にもう瞰　紅多呂
窓口の娘も當てる氣の一萬圓　紫津
子の貯金もう窓口の顔馴染　水容
窓口でポリの行方を見つめてゐ　春巣

川雑 **鶴町支部句會**（大阪）
六月十三日　岩橋双虎報

ドッコイショ銃後を守る稲の束　双虎
幸福は孫さし上げてドッコイショ　小柳子
出戻りの目には淋しきほたるの火　白峯
妹の戀に出戻り口を出し　ライト
夏服になつて益々やせてゐる　八九滿
夏服の釦は去年取れたまゝ　ライト
なつかしい便りに不足税が要り　小柳子
居所を知らす便りは病んでゐる　よしみ
母からの便り子供のように云ひ　双虎
大膽を瞳に見せて寄せつけず　八九滿
鯉のぼりあゝ日本へ上陸だ　よしみ
吸がらを踏んで上陸第一歩　松太樓
上陸へ君の名も書く要があり　白峯

川雑 **廣島支部句會**（廣島）
麻生路郎師歡迎句會
六月六日　大森風來子報

犧牲者の上でポスター揺れてゐる　須彌浩
油斷もすきもあつて可愛がられ　幽香里
猫思へらく今ぞチャンス　俗菩薩
美しい馬鹿に油斷をしてやられ　柳石
御油斷は召さるなといふ眼の動き　久米雄
行路難油斷したとは思はねど　蓮生
注意した方がすられて歸つて來　秋無草
盗人猫今日といふ今日どやされる　露斗
うちの子も三つうつかりほつとけず　伯峯
女房がゐたばつかりに醉ひつぶれ　路郎
墓石へ突きあたるとは思はざりき　同
芽は出たが猫や雀に氣がつかず　同
理性崩した今日の苦酒　天國
理性そも二重人格とも見られ　秋史
女ふと理性を越えた醉になり　江波
理性のもろさ柳の芽を見つめ　風來子
理性とはじき豆をむいてゐる　田鶴子
窓に雲情におぼれぬ事務机　某人

麻生路郎師歡迎句會　於廣鐵局倶樂部　六月六日

頑くなゝ心は捨てむ水密桃　同
氣をとりなほす扇子ピッタリ　同
前身を知つてる彼につけこまれ　白外郎
奥様の煙草で知れるその昔　雅水
履歴書にはつきり書けぬ事もあり　紅口
前身がばれた今夜の隠し藝　樂人
前身をきかれて衿をかき合せ　秋無草

（向つて右より）
（前列）風來子　秋無草　久米雄　某人　路郎師　柳石　秋史　江波
（中列）市多樓　天國　白外郎　露斗　心太樓　紫浪　よしえ　田鶴子
（後列）蓮生　草雲子　失名　清登詩　失名　三郎　雅水　俗菩薩　幽香里　樂人　須彌浩　伯峯　佐伯　虹樓

消燈へ女の醉の甲高い　市多樓
防空の街消燈の中に明け　清登詩
消灯へ電球別の光りやう　草雲子
消燈の自分になつた足をのべ　三郎
燈を消して川舟たゞの舟となり　心太樓
消灯の鼻へ蘭蒲團匂ふ　某人
消燈へマリヤの像をひきよせる　風來子
襟足の汚れ氣にしてゐる奇遇　同
舊悪に脳れて奇遇の他愛なし　久米雄
片言の軍歌もうれし母の背　虎竹
片言が言へて日記へ母らしく　紫浪
片言が言へて近所に借りられる　虹樓
片言が飛び出しそうな子の寫眞　伯峯
顔役がまだ揃はない膳につき　紫浪
顔役へ今日も冷たいものが降り　露斗
顔役へお茶をすゝめる手がふるへ　幸路
暇乞ひ後姿が淋しすぎ　虎竹
暇乞ひ言ひ過ぎたのを少し悔ひ　須彌浩
暇乞ひ鼻緒のかたい下駄をはき　俗菩薩
手の荒れを暇乞ふ日に勞はられ　三昧
暇乞ひ庭から入れば蚊やりの火　柳石
ポケットへボタンをかけた給料日　風來子
ポケットの小錢電車を待つてゐる　久米雄

五月十日

繼母も矢張り手を引く交叉點　三昧
交叉點みかんが落ちたまゝ通り　久米雄
六階で見る交叉點よく動き　伯峯
交叉點女の方が早うゆき　風來子
社會鍋奥様一寸考へる　伯峯
押賣りへ若奥様が膝をつき　久米雄
婦人科へ行く奥様の身だしなみ　伯峯
奥様に奥様が會ひ聲を變へ　三昧

六月十一日

爆發とゴシックで刷り死傷なし　三昧
自轉車と自轉車爆發せず別れ　俗菩薩
爆發しそうなドアへ給仕たち　風來子
爆發の二人と別な床の花　幽香里
爆笑へ向きを變へない女事務　久米雄
壁紙を張る事にして大家去に　同
普譜場の壁待ち切れずふれてみる　須彌浩
壁に向ふテーブルがあり一人飲む　心太樓
まだ壁もついてないのに斷はられ　三昧
叱られた乞食だまつて歩き出し　俗菩薩
乞食また出直して來た聲を變へ　幽香里
乞食の面影母に似てわびし　須彌浩
乞食の子やつばりもらふだけの智慧　天國
刑事今日乞食へ注目して歩き　風來子

川雑 **竹原支部句會**（廣島縣）
五月廿日　西野みづほ報

間を貸して後悔してる未亡人　愛鳩
俸給日夜更けて間借歸つて來　芳郎
愛人が片附けて行く二階借　芳泉
四疊半の間借に目立つ蓄音機　みづほ

川雑 **下關支部句會**（下關）
六月一日　東方司半休報

純情な顔はほんのり櫻色　潮流
十八娘も化粧人なみに　樂千坊
良緣へ娘耳まで赤くする　逸千坊
あの顔で娘時代があつたんか　米三
成功を今日まで俺は待つてゐる　逸千坊
花に醉ひ時局を知れとしぼられる　草路
不治の病聞いて迷の足を踏み　苦笑
迷信と言つて仕舞へぬ千人縫ひ　半休
非常時へ赤いネクタイ減つて行き　綴
ネクタイがもう用のない赤襟　蘭京
ネクタイの柄に個性もうかゞはれ　柳子
精勤でありネクタイの日燒せり　九呂平
二日醉ネクタイ上手に結べない　柳月
ネクタイとしばし別れの旗をたて　賢次
麥藁を焦がす煙に日が落ちる　代志久
黨風へ奉仕の鍬をふるモンペ　半休
髮と襟ばかり見つめて通り拔け　將
雑沓の中に掏摸の目刑事の目　光輝
雑沓へもうたまらない孫を連れ　代志久
雑沓も何時か夜霧に吸込まれ　斗風
雑沓を二階から見る面白さ　不川
車座で何處が上やら下座やら　比呂志
車座のオルガンの音も日本晴　文福
車座へみんなの口がもつれてる　つゞる
正月を樂しく過すカルタ會　はつみ
車座で一人唄へば皆んな唄ひ　草路
車座へ一ッの蠅が邪魔に來る　市多樓

六月二十五日

畠一面を南瓜のたうつて　藤市
今日も又南瓜ですかと愚痴を云ひ　柳月
南瓜のにほひ梯子を昇つて來　九呂平
南瓜でもたけよと畠から歸り　賢次
南瓜の片荷へ銃後の子をのせて　半休
初南瓜のせて隣の皿かへし　賢次
昇格へ母の心の鱠なり　九呂平
昇格に心盡しの頭付き　比呂志
若い身にじみな扇子で後家を立て　賢次

艶麗な美人の扇子蝶に見え　あきら
二階借り下の喧嘩におり兼て　市多樓
よいとこに住んで二階は人に貸し　半休
二階から見る洋傘の色は春　市多樓
果物屋夕陽を受けるトタン屋根　代志久
トタン屋根玄關があり庭があり　市多樓
公園の茂みへ粋な暖簾掛け　九呂平
體位向上なぞと公園巡つて來　山彦

川雜　**葉櫻支部句會**（大阪）

潮花師榮轉祝賀　梅田秀溪報

地震だつた時計のふりことまつる　競舟
腕時計卷いて後れたわびを言ひ　鼓愁
連絡を鳩へ頼んだ決死隊　秀溪
瀉千鳥波は眞白き地平線　筑波
記念品君に送るに家を出る　一二三
落ちぶれて恩師の門を通りすぎ　紅多呂
生きて行く道を恩師におしへられ　花笑
恩給で暮す恩師へ柿實る　潮花

川雜　**四ツ橋支部句會**（大阪）

六月七日　中内翠芳報

山上嶽登山

大峯山高山植物さがしつゝ　糸柳
大峯山ランプを見るは久しぶり　秀甫
大峯山行場の心澄んでゐる　朗舟
大峯山ランプの下で酒をつぎ　緑雨
足下に雲湧きあがる大峯山　翠芳

六月十七日

洋裝が餘り似合はぬ太い足　翠芳
洋裝へ欠伸もしてる傷病兵　白峯
洋裝の足どり輕き春の道　夢想
洋裝で二等に乘つた里歸り　緑雨
犯人も良心に歸る刑事室　山人
下の關から犯人護送されて來る　双葉
留置場でぐつする眠る八犯目　素人
神頼みして犯人も匿れて居　德麿
犯人として肉親の眼に出合ひ　八九滿
犯人は世間話をして歸り　竹葉
犯人へ十六燭の灯がともり　亘人
犯人が月の入るのを待つてゐる　夢想
犯人は神社の前を避けて行き　美奈子

川雜　**塗青支部句會**（大阪）

六月二十二日　淺謙公報

マッチの火大切そうに手で圍み　月草
燐寸賣る店があつたと知らせに來　久子
所在なさシューツとマッチ擦て見る　子元
二階借り晝寢丈けでも大の字に　ひさし
ソフトカラー歪んだ晝寢よく眠り　香林坊
添寢するとこへ信樂屋の太鼓　光路
子を伴れて涼しい寺へ晝寢に來　謙公
釣竿の片手離さぬ飯を喰い　博行
何が釣れますかとピクのぞき込み　謙公
釣れそうな手付きで糸を抛げはなげ　光路

阪大川柳會（大阪）

六月二十七日　於　醫院會議室　丸島利生報

富士の裾野で新聞辭令よみ　栞
戀と云ふものを小說欄で知り　水虹
新聞を見て訪れた生みの母　同
新聞のどこを讀むのか女中部屋　柳秀
庭へ出て讀む夕刊へ暮れかゝり　水虹
吉報の出た新聞を買ひ集め　春巢
稍あつて新聞が出る應接間　同
大毎へも大朝へも寄附せにやならぬ　同
胸に脚に娘心が躍つてゐ　方正
再會を娘心に待ちつゞけ　水虹
ガム嚙んで娘心は笑ひこけ　栞
月見草乙女心の夢に咲く　同

川柳を募る

★化粧新聞社柳壇

課題「落下傘」八月十日締切
「唇」九月十日締切

選者　麻生路郎氏

用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）

宛先　堺市出島海岸通二丁一八二番地
不朽洞

叱られた娘心は死を思ひ　春巢
冗談と娘心は受取らず　同
母のない娘心の世帶じみ　同
お別れに娘涙を出すときめ　方正
何を探すかおばあちやんの信玄袋　栞

切符制何時もの顔が利かぬなり　水虹
貰ひ物の値段見に行く閑があり　春巢
心中のそれもセル着る頃だつた　栞
入院をする箱枕笑はれる　春巢
インフレが石碑刻みに還るなり　栞
アメリカへ金持涼しう逃げてくる　方正
論理の動物となりて青白し　栞
ボックスで呉服屋さんがもてゝなる　水虹
仔猫上げますは御寮人さんの筆　春巢
仔澤山こつちは俺が引き受ける　同

松坂倶樂部句會（大阪）

六月十六日　石井白面人報

あんころも水割酒が笑はれず　生々庵
九十四で死んで餡ころ餅が好き　普天
集れに餡ころ一つ呑み込んで　同
餡ころの品定めして一家無事　孤篷
餡ころのつもりか子供泥をこね　白面人
護れ祖國さて王様の御ゆくえ　生々庵
うどん食ふ事も小さい祖國愛　普天
嗚呼祖國六連が見えて寢て居れず　同
日本宿祖國の花が挿してあり　同
功ならば祖國の母を引取る氣　普天
古事記誕生入道雲の上を見る　孤篷
デマだとは知りつゝ祖國案じられ　同
日の丸を立てゝ木の間の領事館　同
病院船祖國の綠い山が見え　同
首府だけはつぶさず敵に奪はせる　同
うれしさは祖國の土の上に居る　白面人

白蘭英佛捕虜無數

祖國より俺が大切と捕虜になり　白面人
爆撃をうけぬ祖國の切符制　同

七月七日

海水浴下駄ばき似合ふワンピース　普天
只つかるだけに海水着の派出なこと　同
泥海にされてそのまゝ風いでゐる　孤篷
アゝラゝモード甲羅を干しなげて去に　同
海水浴拔き手を誰かに見せてゐる　生々庵
海水浴末つ子らしい生ッぢろ　同
灼熱の戀もあります海水浴　美根子
海水浴弟が邪魔になつてくる　白面人
蜜豆と黑いレースの手袋と　孤篷
うどんやの蜜豆が出る貸事務所　同

送つて來た妓に蜜豆を誘はれる　普天
みつ豆だけでよくも話すよ女同志　同
蜜豆の好きなことまでしられてゐ　美根子
僕も蜜豆だと如才なく　同
蜜豆を割勘で取る女連れ　白面人
有閑マダム娘にみつ豆を覺えさし　生々庵
奥樣はみつ豆くわしく居らせられ　同
贅澤に育ちボンボン勤まらず　普天
贅澤の名殘とゞめたボルサリノ　孤篷
贅くらべ勝ちは珊瑚のちらし縫ひ　同
贅澤をしても淋しいやもめなり　同
贅澤も板についたる身の果報　美根子
贅澤になれて二號の浮き沈み　同
債券を當てに豪華なプラン立て　白面人
贅澤を一つ話に落ちぶれる　同
贅澤は云はぬ一本つけてくれ　生々庵
贅澤は拜む心を忘れさせ　同

有恒川柳會（大阪）

六月十三日　寺井鋭々報

征きし子の後姿の夢を見し　五遊
後ろからもう一枚と晴姿　同
苦勞した後姿が痩せてゐる　行三
ッツと立つた後ろ姿に名殘りあり　波夢造
宗右衛門町後ろ姿は只で見せ　同
嘘申し後ろ姿へ手を合はし　鋭々
氣の弱さ後ろ姿の肩に見せ　同
横柄に構へて見ても四給俸　五遊
省内に知らぬ人なし生字引　同
勇退して官吏家賃の相場知り　行三
厄前だ今が官吏の見限り時　同
即答を避ける官吏の老練さ　波夢造
榮轉の官吏は土地を褒めて行き　同
係はあちらと官吏椅子を引き　同
官吏とは見えぬ姿で鮎を釣り　同
役相當の人數で官吏迎へられ　同
宿帳へ官吏と書いた薄い髭　鋭々
子澤山官吏生活二十年　同

六月二十七日

番頭サンそんな昔があつたのか　波夢造
番頭をサン附けにする賴み事　同
知らざるに非ず番頭の利口なり　同
商賣は番頭任せ茶に耽り　鋭々

令孃の英語番頭苦手也　同
番頭になつたでにきび氣にかゝり　行三
襯衣丈は替へて行きナと夏の旅　波夢造
兄サンの襯衣が着られぬ健康兒　同
隣からシャツ一枚で西瓜へ來　鋭々
シャツ着せて了へばそこに子は居らず　同
ワイシャツの袖まくつてゐる平社員　同

鈍足會創立二十周年記念**句會**（大阪）
六月二日　於　大鐵クラブ
丸尾潮花報

ビールビール寝るには惜しい宵となり　夕鐘
宵の灯へ卷帶で出る面白さ　葉光
某人　風葉
文無しへ四ツ辻の風おもしろし　水客
約束を女の聲でことわられ　指洋
約束の朝は日本晴れになり　秀渓
妹がそばで聞いてる電話口　綠水
妹へ晴着を送る姉心　小松園
妹の目方を聞いて叱られる　孤逢
妹の乳房へ瞳外らしたり　松太樓
童顔が妹にダブル華燭の夜　春巣
節米へまだおとろへぬ力こぶ　彩泡
節米の云ひ譯云うて麥を買ひ　豆秋
愛の巣の窓際にある植本鉢　清月
植木鉢お白粉臭いとこで枯れ　一笑
二十歳代子供心がまだのかず　紅多呂
行きづりに花の香をかぐ二十歳代　水虹
二十歳代母校に嘘を言ひに來る　万的
レヂスターの蔭で二十歳代が過ぎ　久米雄
時間きっちりやつて來るのも二十歳代　鼓愁
日本の良さほめ合つて二十歳代　南風
エス様を信じきれない二十歳代　龍成
何程のことやあらんは二十歳代　白帆
二十歳代母の寫眞がうすれゆく　路郎
甲種だと強く答へた二十歳すぎ　同
啄木と同じ病ひの二十歳すぎ
手紙ばかし書いてる息子二十歳代

尼崎句會（尼崎）
六月十二日　橋本路風報

美知夫君出征歸還歡迎

故郷へは遺言の心算二度三度　辛雅
遺言は只萬歳とのみでした　毬夫
遺言を書けと言はれりや書けもせず　山下
遺言になるとは知らず聞き流し　正覺坊
遺言はもうそれだけかと末子聞く　路風
私生子を世に出す遺言だけだつた　南濃路
旅先の車内で友とふと出合ひ　川舟
轉戰々々竹馬の友にめぐり逢ひ　正路
淋しければあゝ彼奴を呼んで來よう　櫻花
水枕來る友達はみんな來た　和一郎
十年目に會つた友から無心聞く　路風
嬰兒と初對面の歸還兵　杢太郎
歸還していよ〳〵人氣者となり　南濃路
歸還兵わさびの味を思ひ出し　美知夫
歸還兵無口になつて歸るなり　同

體位向上

★裸の句會★

——南海線みなと海岸で——

めまぐるしき社會の俗塵を洗ひ、大海原の彼方に皇軍勇士の勞苦を偲び、灼熱の砂上に體位向上をかねて、句作三昧のひとときを過すのも意義あることゝ「裸の句會」を開催致します。奮つて御參加の程を……。

★日時、昭和十五年八月拾一日第二日曜
午後一時——三時（時間嚴守）
★集合場所　堺市出島海岸通二丁一八二
（南海本線濱驛下車南へ二丁）
★會場　於湊海岸の渚　不朽洞
（この句會は別に御案内狀は差出しませんから柳友誘はせてお越し下さい）

川柳雜誌　**裸の會**　幹事

夏の宵浴衣の糊が心地よし　柳太
春の宵ゆるみ勝ちなる靴の紐　八歩
宵を出る娘の紅のやや紅し　潮花
太陽へまわる日傘は希望もち　久枝
太陽に消防自動車よく光り　染史
太陽にバケツの水が光るなり　かほる
太陽へ顛した石の裏が濡れ　市多樓
太陽へ眞直に立つ忠靈塔　鈴水
一粒の麥太陽へ伸びてゆく　鮎美
太陽へまともも船出の日本船　紫香
虫の聲ふと四ツ辻へ來てしまひ　秋子

川柳雜誌

八月の會

★日時　八月三日夜七時（土）
★會場　御津八幡宮（電話南八六四〇）
南區八幡町佐野屋橋筋角（木棉橋電停下車東一丁・八幡町市バス停西一丁）
★兼題　「落下傘」（五句）……麻生路郎選
（前月句會の句中より）……水谷鮎美
★講評　「稲荷様と川柳」……清水白柳子
★柳話
★會費　三〇錢（川協章提示の方は二五錢）
★星賞　天位（各題）に扇團（路郎染筆）を贈る
幹事　翠芳・潮花・斗風・紫香・水客
滿潮・里十九

大阪市西區江戸堀上通二ノ四六（昭和ビル）
主催　**川柳雜誌社**
電話佐堀三三三三
八一六三番
——本社の句會は毎月第一土曜——

（著者の寫書は眞寫）

麻生路郎著
新川柳評釋
「川雜投句箋」
定價八拾錢　送料六錢
一冊十五錢　送料三錢

藤村誠一氏著
隨想集
詩人複眼

序　麻生路郎氏　百田宗治氏
跋　吉川則比古氏　田村孝之介氏
裝幀

★「詩人複眼」は月刊「川柳雜誌」へ藤村誠一氏が高鷲亞鈍のペンネームで執筆連載の隨想集に「日本詩壇」「日本文藝」「婦女世界」「上方二十世紀」等へ發表の數篇を「詩人胡座」の題下に一括增補した近代人必讀の書である。定價壹圓（送費六錢）—海外送料實費—

堺市出島海岸通二丁一八二番地
發行所　**不朽洞出版部**
振替大阪三〇三九二

特異性全免疫元
オムニン トツメコ
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
（適應症抜粋）
淋疾、各種肺炎、肋（膜）膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、蓋膿腫、其他各科、急性、熱性、疾病性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し廣汎に渉り著効を奏す。
（特長）
注射無痛、副作用絶無、用法簡單、奏効迅速、價格亞聯。
（包裝）
二cc五錢入　二cc一〇錢入
二cc五〇錢入　二cc一〇〇錢入
一cc一〇錢入　一cc五〇錢入
發賣元　株式會社黒田藥品商會
大阪・東京
—文獻贈呈—

後記

▲世界が目まぐるしく變轉しつゝある時に米内内閣が出現して近衛内閣が後退した。文部大臣が橋田邦彦氏一高の校長で醫學博士といふ變り種である。内務大臣は元大阪府知事をしてゐた安井英二氏だ。趣味陣營へどう響くか。

▲本號はサンと原稿を盛上げて見たが、まだまだ戯せ切れぬ。平時だつたら、增ページしてもいゝところだが自肅時代にそれも出來ぬので、目をつむつて辛棒したお許しを乞ふ。

▲月評「川柳一下筋」は好評噴々だ。前號は殊に評判がいゝ。それにつけても、遠隔の地にあつて、この月評會に出られない方々が嘗に脾肉の歎を洩らされてゐるので、山雨樓氏の肝煎りで通信句評會を開催した。本號掲載の「川柳合評火の見櫓」がそれである。その煩を厭はぬ參加者諸氏の勞を多とする。次回は更にメンバーを殖やして各地の地熱をもりあがらそうと思つてゐる。

▲隨筆は相變らず賑やかだ。前田五健氏の「狸」安川久留美氏の「送り火」古川風竹氏の「螢の光」高橋かほる氏の「街に住めば」小畑自由朗氏の「愚談」佐々木三福氏の「彩票夜話」石崎柳石氏の「冷汗」寺井鋭々氏の「雲中語」等々々

▲前號高鷲亜鈍氏の「比喩の問題」について各方面から意見續出したが句主の麻生蔑乃の辯と、森東魚、米本貴志子兩氏の意見を「反響三つ」として發表するにとどめた。

▲張家口の岩崎柳路氏から蒙彊奥地への皇軍慰問行の句と記事と寫眞が届いた。慰問と稱して大名旅行式に戰線の邪魔をして歩く人達が無くはないが柳路氏等の慰問が如何に効果的であつたかは紙背を透して滲じみ出てゐると思ふ。

▲一路集の岩崎柳路氏選の「豚」の選稿が締切までに届かなかつたので次號に發表することにした。通信の往復すら二週日を要するところへ、旅行後の多忙さに、遲延してゐるらしいので、諒とされたい。

▲次號は皇紀二六〇〇年奉祝に併せて本誌の創刊二〇〇號記念の特輯號だ。時節柄派手な催物はしないこととしたが三越の八階ホールで我社らしい「川柳とは？の會」といふ眞摯な會を開くこととした。この會についても、特輯號についても格別の支援と御鞭撻がお願ひしたい。

▲原稿締切厳守が殆んど遠成されて來た。有難いと思ふ。次號は特に御留意を乞ふ。（路郎）

募集

第十七卷 第拾號課題
八月廿日締切（十句以内）
家庭　水谷鮎美選
ポスター　石曾根民郎選

第十七卷 第拾壹號課題
九月廿日締切（十句以内）
古道具　前田五健選
臨終　正本水客選

第十七卷 第拾貳號課題
十月廿日締切（十句以内）
咳　黒川紫香選
襷　杉原大研子選

毎號募集（毎月五日締切）
近作柳樽（廿句）　麻生路郎選
川柳塔　麻生路郎選
同舟近詠
各地柳壇（會報）
文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は厳守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

定價

一部　金三十錢（税一錢）
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

廣告料

本誌への廣告に就いては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

禁無斷轉載

新聞紙法に據る本誌の刊行は保證金

昭和十五年七月廿五日印刷　第十七卷　第八號
昭和十五年八月一日發行　（毎月一回一日發行）

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます御註文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）
川柳雜誌社
電話土佐堀（三三三三番）（八一一六三三番）
振替大阪七五〇五〇番

社關係の人々（いろは順）

主幹
麻生路郎

客員
藤里好古　小林不浪人　森東魚　畠山一歩　沖野岩三郎　大島濤明　亀井晟修　川上三太郎　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　奥村丹路　永田里十九　西田艸樂　福田山雨樓　高橋かほる　橋本絲雨　大谷五花村　不朽洞會員　石曾根民郎　戸倉普天　小畑自由朗　古川竹海　前田五健　川覽花麗　岩崎石友　藤井友郎　★北山悟郎　水谷鮎美　岡田某人　岩崎松代　丸尾潮花　大坂形水　双虎　黒川紫香　正本水客　原史風　中西おさむ　古川北風　小畑自由朗　石曾根民郎　竹香附子　押谷たけを　關根山彦　尾一葉　西多田不一　櫻田中風　中原銃人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　澤小松園　蘭住潮　魚岩本雀踊子　清水友帆　松井円坊　石野秀雄　清水史路　清水白柳子　西川愁水子　中内翠芳　多田市多樓　濱田賢次　光笑　會（大阪）里十九　竹原支部（廣島）芳郎　廣島支部（廣島）風來子　名古屋支部（名古屋）水車　豊中支部（豊中）紫香　下關支部（下關）半休　北鮮支部（清津府）美笑　蒙彊支部（張家口）柳路　上海支部（中華）天作　鐵道病院支部（大阪）春巣　葉櫻支部（大阪）秀溪　四ツ橋支部（大阪）翠芳　布哇支部（布哇）寛花麗　堺支部（堺）銃人　岡山支部（岡山）九坡

支部と幹事

道頓堀支部（大阪）萬よし　九三會支部（大阪）梧郎　函館支部（函館）晟修　梅田支部（大阪）鮎美　簸川支部（島根）緑之助　鳥取支部（鳥取）鐵州　松山支部（松山）虻之鷹　天王寺支部（大阪）八九滿　鶴町支部（大阪）双虎　御池橋支部（大阪）いわを　松江支部（松江）山川兒　大鐵局支部（大阪）水客　西條支部（愛媛）英賀夫　城南支部（大阪）申仙　今治支部（今治）文庫

賣捌書店

（大阪）參文社　三越書籍部　明文堂　朝日ビル書店
其他市内各書店（東京）東京堂　巖松堂　吉岡書店
玉森堂　紀伊國屋　三味堂（神戸）米田寶文館（函館）
石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

アサヒビール

大日本麦酒株式會社

孟暑を
征服
一擧
保健へ

—含有滋味の
アサヒビールで

安産のために

姙娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

片瀬醫學博士述
「安産のために」冊子呈上

樹林醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査

ワダカルシューム錠

大阪道修町 和田卯助商店

金屬代用罐
食品用紙容器
アイスクリーム用紙器
製造輸出

二葉屋商店

大阪市住吉區晴明通二丁目四〇番地
電話 事務所用 天下茶屋四一〇四番 / 天下茶屋四三〇二番
工場專用 天下茶屋四九五四番
振替口座大阪九七〇四四番
郵便私書函大阪天下茶屋局一八番

SENRYU ZASSHI

Published montly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十五年十一月廿五日第四種郵便物認可　昭和十五年八月一日發行

川柳雜誌　NO.199

定價金30錢　送料登録

りとびきに

美顔水

ニキビ

ニキビ・吹出物に
ゼヒ此藥

蚤・蚊・南京虫等の
毒虫でカユい時！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

▲ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の藥です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！ゼヒお勸したい藥です！

▲定價一瓶四十貳錢・六十錢・一圓廿五錢・全國藥店にあり

5—53

水顔美 化粧用

アブラ顔のお化粧下に最適！